

JUMP COMICS



めだか

ボク

21

「私は人間が  
大好きです」

原作

西尾維新

漫画

暁月あきら

★この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などには、  
いっさい関係ありません。デジタル配信用に再編集を行っています。



JUMP COMICS



めだか

ボックス

21

「私は人間が  
大好きです」

原作

西尾維新

漫画

暁月あきら

# CHARACTERS

キャラクター & ストーリー

# STORY

黒神めだか



生徒会長  
人吉善吉



書記  
鰐塚処理



副会長  
名瀬天歌



会計  
江迎悠江



庶務  
虎居 碎

箱庭学園  
第百代  
生徒会執行部



球磨川 禊



安心院 なじみ



不知火 半纏



不知火 半袖



鶴喰 鴉



費波 生煮



獅子目 彦彦



帯



杠 かけがえ



寿 常套



鶴喰 梟

鶴喰梟の影武者として箱庭病院にやってきた不知火半袖。鶴喰梟の行方を追うめだか達も同じく箱庭病院へ到着するが、妨害を受け、めだかが足止めされてしまう。彼女と別れ半袖の捜索に向かった善吉達は、遂に再会を果たすも、拒絶する半袖は球磨川とのバトルへ。その戦いの中で、球磨川の目論み通り、半袖は善吉と和解する。しかし、そこへ帯から獅子目彦彦が向かっているとの知らせが入るが……！

一方、鶴喰鴉と費波生煮は鶴喰梟の元へ辿り着き、親子対面の時を迎え……！

STORY



# MEDAKA

## CONTENTS

# 21

第177箱	「この人は今まで」	7
第178箱	「約束はできない」	27
第179箱	「私は人間が大好きです」	47
第180箱	「黒神ファイナル」	67
第181箱	「私達は負けたんだよ」	87
第182箱	「言葉は届く」	107
第183箱	「心と共にあるような」	127
第184箱	「そしてめだかちゃんは」	147
第185箱	「いちたすいちは」	167



# BOX



そうだそうだ  
息子だ息子！

そんなの昔  
作ったんだよな！  
うわ懐かしー！

どれもつと近くに  
来てよく顔を  
見せなさい！

第177箱

「この人は今まで」

……  
おやおや  
随分無愛想な  
奴だな

いったい誰に  
似たんだか  
って

俺かあ！  
あははは！

そして生煮  
任務ご苦労だったな  
よくやった

俺の指示通り  
無事にめだかちゃんを  
この病院に連れてきて  
くれたようじゃないか

指示通り  
連れてきたって…

費波  
お前まさか…!!





黒幕ぶつてる  
あんたが!!

ぽつと出の私に  
ぶちのめされるって  
展開さ!!

悪目立ちを嫌う  
本人の性格ゆえ  
スポットがあたることは  
少なかったが

黒神めだかの従兄弟  
ダークヒーロー  
鶴喰の戦闘力は  
当然ながら高い

回転のスキル  
「独楽図解」

試したことは  
ないが

地球の自転や公転さえ  
操れるアブノーマル

引力のスキル  
「引っ張り足」

二重の  
意味で

他人の足を  
引っ張るマイナス

そして  
「挑発使い」

封印状態とはいえ  
安心院なじみから  
さえ

冷静さを奪った  
独学のスタイル

これらを組み合わせた  
『鵠システム』を  
使う彼は  
箱庭学園でも

屈指の实力者  
である！



おいおい  
いきなり騒いがかつて  
くるなよ  
ひつくりするなあ

何を怒ってるんだ？  
まったく  
親の顔が見たいよ

ひよつとして  
それも俺かな  
あつはつはあ！！

それにしても  
気をつけろよ？  
我が息子

お前の命は鴻毛より  
軽いが俺の命は  
地球より重いんだぞ

いや  
マジでマジで



そんな…  
隣システムが通じない  
相手がいるなんて…

もう何を  
信じたらいいのか  
わからない!!

いやお前  
「隣システム」も  
知らないだろ!!

お前はまず  
自分を信じない  
ところから始める!!

おいおい  
何を言ってるんだ  
生煮

これはお前に教えた  
スタイルだろうが

逆転接統の  
スタイル  
逆転(説)使い

「だからこそ」の  
ひと言に特化した  
スタイル

相手が強い  
「だからこそ」  
勝てる

強固で巨大な物体  
「だからこそ」  
斬れる

不可能を可能にする—  
というよりは「逆説的」に  
確率が低いマッチほど  
実現させるスタイルかな

逆接(説)使い…

そういえば…生徒会に囲まれたとき  
「あえて」強い奴(名瀬さん)から  
挑んだって言ってたっけ…

それは戦略というより  
そのほうが勝率が上がったから…?

そのスタイルを  
使いこなせば優勝は  
お前だったろうに

どうしてお前は  
漆黒宴で「逆説」を  
いい加減にしか  
使わなかったんだ?





保険がきみだよ  
鶴喰 陽

遺伝子的には  
鳩姉に近いはずの  
俺の子供なら

育て方次第じゃあ  
ひよつとしたら  
「優しい鳩姉」に  
なるかもって思っ  
てね

まあ結局息子が  
生まれちゃったんで  
保険にならなかった  
がね

だからすぐに  
育児と計画は  
放棄したんだが

けどまあ  
よかったよ  
俺と一緒にいたら

お前もママも  
俺と一緒に三年前  
殺されていたぞ

だからお前俺に  
お礼を言っておいた  
ほうがいいぞ

愛する——いや別に  
愛してないけど  
我が息子よ

.....  
!!

.....  
泉博士!

あなた...

あなた一体  
なんなんですか!

本場の姉である  
鶴取姉を愛していると  
言いながら  
本人ではなくその姉に  
愛情を注いだり

保険に子供を  
作ってみたい

代理ばかりを  
求めている！

挙句に  
「それっぽきやいい」  
だなんて言って

半袖さまを  
我が物に  
せんとす…

わけがわからない！  
あなたのやっていることは  
あなたのやりたいことと  
全然違う！！

あなたのお姉さんの  
代わりなんて  
いないんですよ！

代理も保険も  
ない！

どうしてそんなことが  
わからないんですか！？

おいおい  
声が大きいなあ  
きみは

それが  
影武者のきみの  
言うことかね

それにそれを  
言うなら  
世間に言えよ

考えてもみろ  
今の世の中

「それっぽいもの」  
ばかりじゃあないか



「すごいこと」より  
「すごい空気」が  
幅を利かせ

天才よりも  
天才のフリがうまい奴が  
評価される世の中だ

「楽しい」より  
「楽しそう」が  
ふいふい言わせる

時代が求めて  
いるんだよ

合成着色料  
を。

いいじゃないか  
俺は好きだぜ  
偽物安物粗悪品

気軽に扱えるし  
壊れても惜しくないし  
無くしても平気だし

何より

飽きたら  
捨てられるところが  
イカしてるぜ











あたら  
新しい…

あたら  
新しい儼わしの敵てきは  
どこだああああ  
ああああああ!!





む！着地の際  
何かゴミを  
踏んだようだな

気持ち悪い…  
あとでよく洗わんと  
いかんぞ…

それより僕の  
敵はどこだ!!



し…  
獅子目言彦…  
馬鹿な早過ぎる…

不知火の里から  
ここまで  
何百キロあると  
思ってた…

言葉使いの元締め  
梟博士がこんな  
あっさり…

「だからこそ」  
勝てる

「逆接(説)使い」は  
どうしたのですか…?



だから  
言ったじゃん  
言彦には

スタイルだって  
通用しないって…

…  
いや違うよ  
不知火さん

スタイルが  
通じなかったのは

言彦だった  
からじゃあない



逆上した人間には  
通じないんだよ

スタイル  
言葉は。

え……？  
いやいやバーミー

確かにめだかちゃんの  
乱神モードには  
スタイルは通用しない  
にしても……

奥博士は  
スタイルの開発者  
なんだろ？

だったら  
そんな弱点は  
誰よりわかっている  
はずで……

当然その程度のこと  
対策していて  
しかるべきだろう

その程度のこと  
がわかってなかったん  
だよ

不知火さんを  
さらったら言彦が  
プチ切れることとか

女の子に結婚を  
強要すれば  
嫌がられることとか

捨てた息子が  
いつか自分を  
刺しにくる  
こととか

その程度のこと  
がわかってなかった  
んだ

思い通りに  
ならないことが  
あったら  
それと向き合わず

すぐに代わりの  
何かを――  
偽物を安物を  
粗悪品を求め

「それっぽいもの」で  
妥協し続けてきた  
この人は今まで

一度も  
怒ったことが  
なかったんだ

だから

本気で怒る  
人間の気持ち

本気で  
わからなかったん  
だよ

怒る人間の  
気持ちが…  
わからない…

確かに…

リミッターを外す前の  
理性ある状態だったから  
通じたってことなのでしょうが

梟博士は青筋を立てて  
「怒っていった」盛気郎相手にも  
なんら臆することなく  
スタイルを使っていた……

それに半袖さまを  
檻に閉じ込めながら  
平気でめだかさまを  
歓迎しようとしたのも

それでめだかさまが  
激怒することを  
全く想像できなかったからか

思えば皮肉な  
ものだよね

個人のスキルに匹敵  
するための技能——  
コミュニケーションの  
技能であるスタイル

共鳴し  
共振し  
共感するスタイル

その開発者である  
鶴喰梟博士が誰よりも  
人の気持ちに通じて  
なかったなんて…

いやそれは  
私も同じか…  
さつき私に  
「逆接(説)」が通じた

ということとは  
私は自分を捨てた  
父親に対して

所詮はその程度にしか  
怒ってなかったって  
ことだもんな…

私は飄々としながらも  
心のうちに父への恨みを  
秘めている奴のつもり  
だったけど

どうやらただの  
飄々としている  
だけの奴だった  
みたいだ……





言彦……

あたしは……



……ふん  
どうやら……  
敵の敵は  
おらんようだな

では半袖  
帰るぞ

不知火の  
里へ。



げ

げげ

げ

僕を知りながら  
僕の前に  
立ちはだかるとは

新しいな  
新しいな

なるほど……  
貴様達が  
僕の敵か——



いや

貴様の敵は  
こっちだよ  
獅子目彦彦

車より  
走るほうが速いと  
言っていたっけな

じゃあここまで  
走ってきたのか？  
ならば

バトル前の  
準備運動は  
必要なからう



私も64万人との  
スパーリングを  
終えて

ようやく  
あったまってきた  
ところだし！



「まあ 善吉ちゃんが  
わからなくもないとか  
言い出したら」

「この場には博士のいうことが  
わからない奴がいなく  
なるんだよね」





第178箱 「約束はできない」



うむ  
如何にも

私は  
黒神めだかだ。

第178箱

「約束はできない」





よいのだ  
弟くん

博士がどういう  
人間だったかは

私が一番  
わかっていた

私に近付いてきた  
目的も  
私の母を求めての  
ことだと

本当は  
なんとなく  
わかっていた

だけど  
少なくとも  
この人は

私の前では

私の前では  
優しい人だったのだ

?

だからそれは  
演技だったって  
ことでしょ?

お前はいいように  
騙されてたって  
だけで...

賢達さん  
一分でもいいから  
黙ってて!!

ああ  
演技だった

演技をしてまで  
この人は

あの頃  
善人であろうと  
してくれた

おれ  
思えば泉博士にとって  
あのときは  
最後の

まともな人間になる  
チャンスだったのかも  
しれん

そのチャンス  
ふいにしたのが  
他ならぬ私だ

私は博士に  
清廉潔白な

理想的な人格者で  
あることを強要した。

博士にとってそれは  
殺されるも同然——

殺されるより  
辛いことだった  
だろうな

だから博士は  
月氷会に殺される道を  
選んだのだろう

博士に限らん  
私は今まで  
そんな風に

一体どれくらい  
の人間を殺してきたん  
だろうな

今回もまた——  
私は間に合わな  
かった……

げ

げっげっげ

この傷を前にして  
雑誌に花を咲かせる  
とは新しいな

貴様は  
花咲か爺さんか？

来ぬのなら  
こちらからゆくぞ  
黒神めだか——



う……うおつ……  
めだかちゃんが  
言彦の機先を制し

懐に潜り込んでの  
ボディスロー!!

いや  
単純なパンチ  
じゃない!

基礎中の基礎  
ではあるが……  
今のはスタイルだ!

スタイルってのは  
共感の技術だからね……  
相手の気持ち  
理解するところから  
始まる!

だからこそ!  
機先を制す  
完璧なタイミングで  
カウンターを取ることが  
できるんだ!

まあ「嘘八百使い」の  
紅さんとバトったつてことは  
大量のスタイル使いと  
戦ったつてことだからね……

言彦戦の前に  
スタイルの基本くらいは  
身につけられたつて  
わけか

そういうこと……  
喋って解説してくれ  
賢雄さん!!

……確かに  
逆上していなければ  
言彦にもスタイルは  
通じるらしい

だけど  
これなら……

これなら  
通じないほうが  
まだマシだった

!?





げげげ  
なるほど

腕を上げたな  
黒神めだか

今のパンチは  
攻撃として  
認識できたぞ

だからこそ  
気合を入れて  
「防衛」せざるを  
得なかったわい

その碎けた拳——  
胸に思うがよいわ



おいおい……  
俺のキックや  
「十三人」のアタックは  
言彦にとって  
攻撃でさえなかった  
っていうのかよ……

うん……

まあ蚊とか  
マッサージとか  
言われてたしね



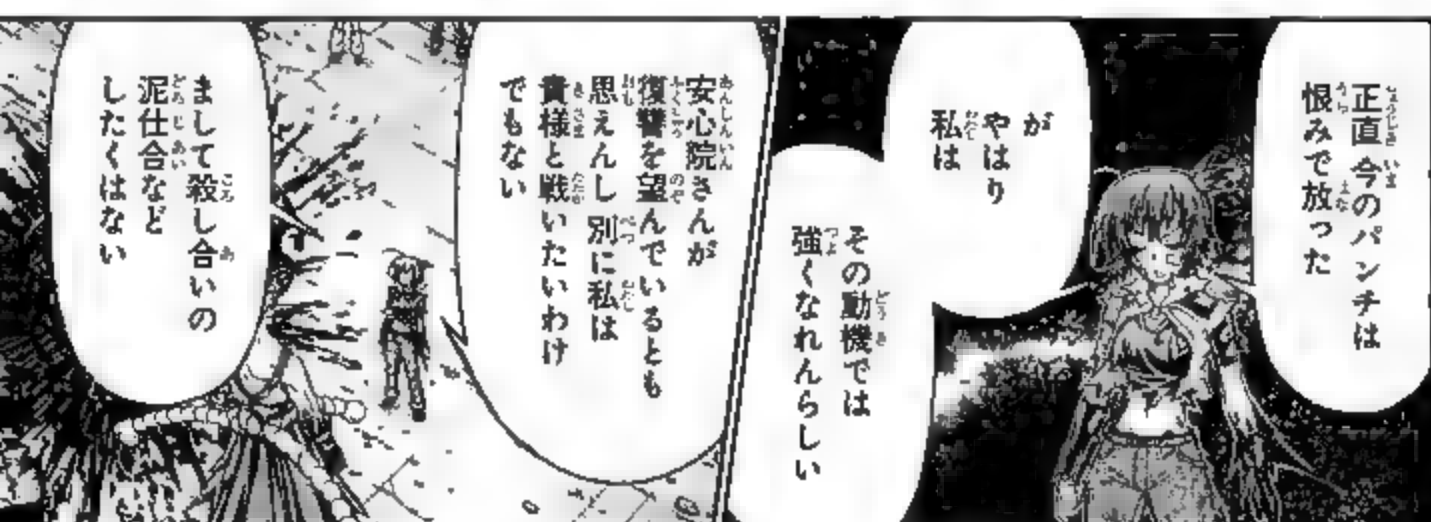
言彦が世界に  
もたらした破壊は  
二度と回復しない

その真の恐ろしさは  
攻撃よりもむしろ  
防衛にあるんだ

ぶつける攻撃が  
強力であればあるほど  
その攻撃自体が壊されて——  
二度と元には戻らない

めだかちゃんとは  
半端に言彦に近付き  
腕を上げることで  
皮肉にも

これで両腕を  
失ってしまった……



いや。

そんな約束は  
できない。



げっげっげっ  
げっげっげっ！

この言彦相手に  
抜かしおるわ！

かつて世界を賭けて  
決闘した猛者共を  
思い出すぞ！

あら  
新しい面白い  
よからうよ

俺に渾身の一撃を  
跳ね返されたとき

貴様はどうせ  
生きておらぬ。



「僕がめだかちゃんと  
戦ったときと  
同じ状況を作った…」



「つまり言彦と  
めだかちゃんとの  
間には」

「めだかちゃんと  
僕くらいの力量差が  
あるってことか…」

けどなんで  
一撃勝負なんだ？

折角スタイルを  
身につけていているのなら  
長期戦に持ち込み  
戦いの中でコッソリと  
つかんでいったほうが…

言彦とのバトルで  
戦いの中成長する  
っていうのは  
無理なんだよ

戦って消耗した体力も  
ダメージになって！  
永遠に回復しないん  
だから

短期決戦に  
持ち込んだのは  
だから正解だ

しかし  
両腕が使えない状態で  
一体何を――





裸足になったー  
じゃあ黒神ファントム!?

だけどあれは  
不知火の里で使って  
既に通じなかった  
はず……

違う! あのとときは  
靴下だったし  
改神モードだった!

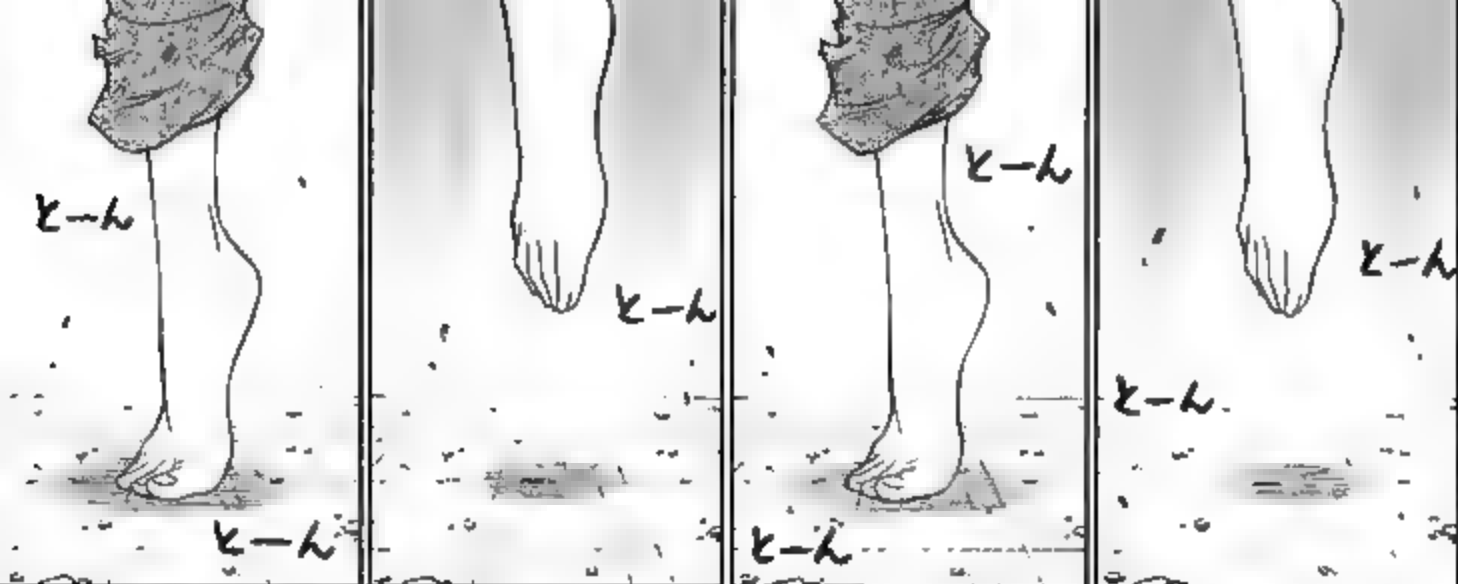
ならばあのととき  
使おうとしていたのは  
スピードをセーブした  
「ちゃんとした版」!

今回は  
安心院さんの  
自殺を止めた  
通常版……

いやあのとときでさえ  
靴を脱いで  
いなかった!

つまり今回は  
完全版  
黒神ファントム!





よ  
!!











みんな

どこかで  
信じていた

敵がどれだけ  
強大だろうと

たとえ  
どんな苦境  
だろうと

めだかちゃんは  
勝つべきときには  
必ず勝つと

だけどそれは  
めだかちゃんが

鶴喰博士に  
理想的であることを  
強要したのに似ていて

だったら俺達の  
妄信的な期待  
こそが

めだかちゃんを  
ここまで追い込んだ  
ようなもので――

無駄だ

『それ』は既に  
ただの死体だ

渾身の一撃は  
完全に跳ね返した。

その少女の  
心臓は

二度とリズムを  
刻まない。

ば…  
馬鹿言うなよ

めだかちゃんが  
死ぬわけ  
ねえだろ

すぐに  
立ち上がるんだよ  
こんなもん

そんな風に  
威張ってられるのも  
今のうちだぜ

ほ…  
ほ…

心臓だって…  
ちゃんと動いて……

そ…んな

嘘

だ…

めだかちゃ…

黒神  
めだか

所詮

現代っ子  
だったな。

あ

ん



違う黒神！

スタイルの使いかたは  
そうじゃない!!

どっちだ...!?

ギンケか!?  
シリウスか!?

両者の判断が  
要求されると...!!



嘘だつ…  
めだかちゃんが  
死ぬわけねえ！

めだかちゃんが  
負けるわけ  
ねえんだ！

めだかちゃん！

めだかちゃん  
めだかちゃん  
めだかちゃん  
めだかちゃん  
めだかちゃん

よさんか

こわっぱ

それ以上  
死者に鞭打つな

敗者を  
其振るような  
真似をするな

だい 179 箱 「私は人間が大好きです」

未熟とはいえ  
獅子目彦彦に  
立ち向かった  
勇敢な騎士だ

侮辱することは  
鎮が許さん

黒神めだか



安らかに  
眠れ

そして  
誇れ

貴様は見事に  
戦った——

だい はこ  
第179箱

わたし にんげん だいーす  
「私は人間が大好きです」



「あれ」

「ここは  
どこだ？」

「中学生のときの  
教室？」

「書庫にやられた  
怪我も治っているぞ」

「服もだ  
まさか——」

「今までの戦いは全て  
夢だったのか……」

「違う！」

「私は確かに  
戦っていた！」

「なのになんで  
こんなところ——」

「ここは  
どこだ!？」

「ここ」は  
安心院なじみが  
お前の中に作った  
空間だよ

彼女が死んだ  
今となっては

ただの空き教室  
なんだけどね

だから私が  
間借りした

無許可でね

まああの人も  
別に怒りは  
しないだろう





おめでとう

お前は  
もう

戦わなくて  
いいんだよ



.....

受け取れ  
ません

私はまだ  
戦わなくては  
なりません

善吉が不知火が  
球磨川が  
弟くんが

みんなが私を  
待っています



.....  
懐かしいな

そして

悲しいな

私も..  
生きているときは..

そんな風に  
そうやって

お前みたいに  
戦い続けて  
きたものだよ





極論  
戦争が起これば  
大量の人間が  
死ぬよな

だけど戦争ほど  
経済を回転させ  
雇用を生み  
科学や医学を  
進歩させる行為が  
ないのは

善意が人を傷つけ  
悪意が人を救う  
という現実

心が折れるよね  
まったくもう  
本当に本当に

誰にも  
否定できない  
事実だよ

何もこれは  
歴史の話をして  
いるわけじゃない  
むしろ極めて個人的な  
話なんだよ

たとえば私の弟は  
クズみたいな変態  
だったけれど

その変態のお陰で  
私は愛を知れた

患者から悪魔と  
呼ばれたこの私が  
少しでも人間らしく  
なれたとすれば

それはあの  
愚弟のお陰  
なんだ

世の中なんて  
そんなものだ  
理想を掲げても  
結局何も変わらない

助けた奴は将来  
人殺しになるかも  
しれないし

殺された奴も将来  
人殺しになって  
いたかもしれない



お前は  
曲がることを  
憶えろ。

でないといつか  
私みたいに

折れて

ぐねって

迷える魂に  
なってしまうよ

お前の友人は  
英雄を継ぐのを  
嫌がっているけれど

それは家業を継ぐのを  
嫌がっている子供  
みたいなものだ

四年もすれば  
意見が変わって  
バックアップとしての  
使命に目覚め

むしろ嬉々として  
英雄を継ぎたがる  
かもしれない

今日はお前に  
感謝しても

いつかお前を  
恨むかも  
しれない

世の中なんて  
そんなものだ

世の中なんて

そんなものだ

羨ましいです

そうやって  
世の中を  
語れるほど

世の中と  
戦い続けた  
あなた

私はまだ  
そんなものと  
語っていいほど

世の中を  
知りませんし

がんばって  
ません！

かつて私は  
己のことを

見知らぬ他人の  
役に立つために  
生まれてきたと  
騙しました

24時間365日  
誰からの相談でも  
受けつけると  
大言壮語を述べた末に

その志は  
破綻しました

私には生まれてきた  
理由なんて  
なかったのです

志も  
信念もなくし

だけどそれでも  
変わらなかった  
気持ちがある  
ひとつある

人<sup>ひと</sup>を見<sup>み</sup>  
人<sup>ひと</sup>を知<sup>し</sup>るたび

わたし  
私は人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>に  
あこが  
憧<sup>あこが</sup>れてきた



わたし  
私<sup>わたし</sup>は人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>が  
だい  
大<sup>だい</sup>好<sup>す</sup>き  
です!  
です!







欲を言え  
ば可愛く  
笑顔で  
死にたい  
ですね

女の子  
ですし☆

懐かしい  
ってのは  
取り消そう

悲しい  
って  
ものね

私には  
死んで  
まで  
なお

戦い  
続けよう  
という  
気概は  
なかった

だけど  
そう言え  
ば私にも  
あったよ  
ひとつだけ

迷いの  
ない  
後悔の  
ない

いまだに  
変わらない  
気持ち  
って奴が

バタンツ

.....

めだかちゃん

お前を  
産んで

幸せ  
だった









な…私われた  
わけでも  
ないのに  
弾かれた…？  
皮膚が痙攣してー  
いや今の「振動」は、



ス・タ・イル  
ですよ

筋肉を「言葉」で  
振動させ  
その振動をポンプに  
めだか様は

血管を動かして  
いるんです

心臓が止まっても  
それならば

血液を全身に  
巡らせることが  
できる



かつて月水会に  
心臓を買かれた  
黒博士も

そうやって  
死にながらにして  
三年間  
活動を続けて  
きたんです

心臓を停めた  
ままー  
動き続けて  
きたんです

血色のいい…  
死人………

…だけどもちろん  
言うまでもなく  
苦肉の策です

一度限りの  
その場しのぎ  
みたいなもの…

受けたダメージが  
消えるわけじゃ  
ないし

めだか様も  
立ち上がるだけで  
やっとのはず…

ふう…

すまん  
言彦

ちょっと  
うとうと  
してしまっ  
た  
さあ続きだ

さっきのは  
練習！

……  
げっげっ  
しかし

練習した技は  
もう新しくないぞ？

ああ  
だから

黒神ファントムは  
使わない

新しい技を  
使わせてもらう

新しい…

技？

…も

もう…

もうやめて  
めだかちゃん！



あたしのために  
これ以上  
戦わないで！

もういいよ！！  
あたしが我慢すれば  
済む話なんだから！！

誤解するな  
不知火  
この戦いは貴様の  
ためじゃない

私のための  
戦いなのだ

私が我慢  
できないんだよ

不知火

私は貴様と友達に  
なりたいのだ！

めだかちゃん



極端な前傾姿勢…  
私に使った  
黒神オーブンブロー？

いやあれは…





あれはなんだ!?



血も肉も  
心も闇も

私のすべてを  
ぶつけるぞ

受け取るが  
よい

終神

モード!!





退院おめでとう  
って感じだね...

ナースルックで  
花束を渡すと:

行くぞ言彦  
これで終わりだ

終神  
モード!!

第180箱 「黒神ファイナル」

声出して  
けよ

どーした  
お前ら

がんばってる奴  
応援するのが

箱庭学園の  
校風だろうが。


だから賢波  
お前が語る……

がんばれ  
!!!!



がんばる  
!!!!






瞬きをすれば  
見逃す特攻  
たとえせずとも  
見失う突貫

しかし  
箱庭病院跡  
院長室

その場にいた者は  
一人残らず  
目にも止まらぬ  
その

黒神めだかの  
特攻突貫を  
「目撃」した






むろん中でも  
はつきり見たのは  
獅子目彦だ

しかしそれゆえに  
旧き英雄の心は  
冷え込んだ

「なんだ」

「この  
程度か」



「確かに先刻よりは  
速いようだ」

「ダメージが抜けて  
いないことを  
考慮すると」

「それなりに  
見事ではある」

高く評価しつつも  
低く看破している


「その新しい  
スピードの  
トリックは」

「心臓停止」

黒神ファントムの  
威力・破壊力を  
跳ね返され  
心臓が停止した  
黒神めだか

しかし  
彼女は

全身の筋肉を振動させ  
血液を循環させることで  
まさかの復活を遂げた



そしてその効能は  
ただの蘇生には  
とどまらない

つまりところ  
それは彼女の  
全身がポンプ

全身が心臓に  
なったことを  
意味するからだ

巨大な心臓  
そのものと化した  
彼女の脈拍は  
いまや常人の数十倍から  
数百倍に達し

その値はそのまま  
身体能力に  
直結する

「が」

「その程度か」

「大して  
新しくもない」

多数の心臓を持つ難敵とも  
戦ってきた言彦にとつて  
たかが全身が心臓の少女など

まるで恐るるに  
足らなかった

「結局この少女も  
散るのみか」

「四千年前の  
勇気ある  
少年のように」

「三千年前の  
優しき策略家の  
ように」

「二千年前の  
老獺な魔女の  
ように」

「千年前の  
二刀流の義賊の  
ように」



「散」

「安心院なじみの  
ように」

「そして」



!?ぬ  
ううう

ぬ



消えた!?

冒険に激突した  
めだかちゃんが…

なっ…  
あああ!?







めだかちゃんの  
後ろから  
めだかちゃん…!?

まさか  
今は

運足による  
分身の術う!?

『増える』  
分身の術と  
『消える』  
風神ファントムの  
合わせ技…!

嘘でしょ!?  
そんなこと  
できるの!?

つまり  
一人時間差攻撃!!

インパクトの瞬間を  
ズラすことで  
言彦の肉体と精神の  
弛緩を狙い澄ます…

いわば  
見えない  
フェイント…!

だ…だけど  
それじゃ結局  
さつきと同じだ!

言彦はあたし達が  
言うところの  
弛緩なんて  
しないんだ!

次元が違う!!

隙をついてと  
タイミングをずらそうと  
戦闘態勢にある限り  
格下の攻撃なんか  
十分に跳ね返す!!

いや違う!

「あれ」は一人時間差  
どころじゃない

スリッ・ブ。  
スリッ・ムだ!!

壁。

地球上で  
速度を追求  
するとき

人間にも化物にも  
例外なく立ちはだかる  
壁がある

比喩ではなく  
本物の——  
物理的な壁

物体が音速を  
超えるときに衝突する  
その「見えない壁」の  
正体は

言うまでもなく  
圧縮された  
「空気の壁」である

日常生活を送る分には  
まったく意識される  
こともない「空気」

しかし  
スピードを出せば  
出すほどに

幾何級数的に  
その「空気」は  
行く手に  
立ちはだかる

最悪の場合  
「空気の壁」への  
正面衝突で

高速物体は  
崩壊することさえ  
あるのだ

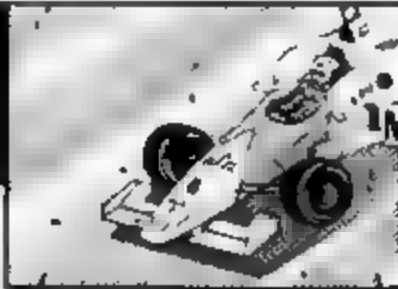
その「壁」を  
強引に突破するのが  
「黒神ファントム」であり



その「壁」と  
折り合いをつけたのが  
改神モードを用いた  
「黒神ファントム」  
ちゃんとした版である



しかしどちらにしても  
ここが地球である  
以上



空気抵抗による  
減速という  
原則からは  
逃れられない

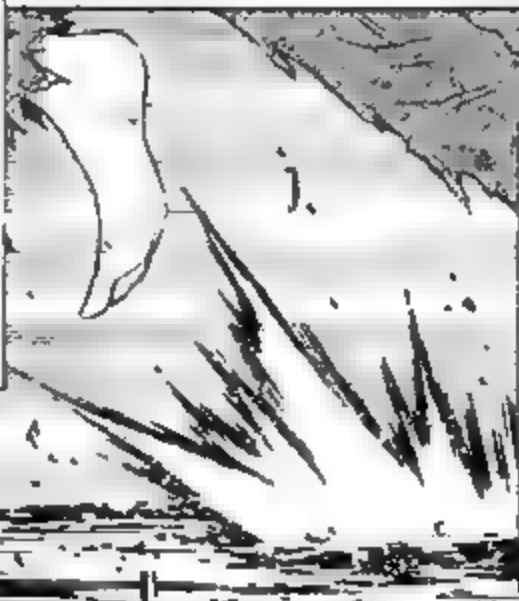


速度を追求するほどに  
スピードを追い求める  
ほどに

逆に減速を  
スピードダウンを  
避けられなくなる  
明白なる矛盾

スピードに乗って  
対象を破壊する以前に

「空気」を突破するために  
スピードとパワーを  
殺さねばならない  
明白なる矛盾



だが  
逆に考えれば？

「空気の壁」ではなく  
「矛盾の壁」こそを  
突破することさえ  
できれば？

それが  
『スリッパ  
ストリーム』

黒神めだかは  
分身を先行させる  
ことで

言彦までの  
分厚い壁を  
排除したのだ



分身と言っても  
それは移動の残像で  
ある――

先陣を切れば当然  
空気抵抗を引き受け

後続のための道を切り開く  
先駆けとなる

先陣を切って  
走ってきた

そのあとに  
みんなが続いて  
くると信じて

むろん彼女自身の  
スピードとパワーに  
変わりはないが

しかし  
遮蔽物なき今

スタイルで増幅された  
運動エネルギーを全て！  
完全に対象に  
ぶつけることが



できっ...



外した!?  
いや…言彦が!

獅子目言彦が  
避けたあ!?

やつ…  
約束が違うぞ!!  
言彦でめえ!!

めだかちゃんめだかちゃんの攻撃を  
すべて受けて立つんじや  
なかったのかよ!!

「…そんな約束  
信じるほうが  
どうかしてるだろ」  
「遊んでんじや  
ないんだし」

「言彦は  
めだかちゃんじや  
ないんだぜ」

「むしろここは  
あおも速度に  
乗った」

「黒神ファントムを  
避けた言彦を  
褒めるべきだ…」

終わった…  
いくらめだか様でも  
これ以上の黒神ファントムは  
ありえない…

限界だ…  
いや  
めだか様は

私と戦った時点で  
限界なんてとっくに  
超えていた…

げ  
げげげ

あ  
悪しからずだ  
この勝負

僕の勝ちだ  
黒神—





黒神 くろかみ  
フアントムを…

曲 まげた

—  
っ!  
!?







自身の背後から  
相手の背後から  
忍び寄る

光速を追求しながら  
闇に潜む  
視覚ならぬ  
死角の移動術

これぞ黒神フアントム  
最終版

黒神ファイナル!

げげ

なるほど  
ファイナルか



一周  
回って

新しい

少女だ...



曲がることを  
憶えただけだよ

急がば曲がれとでも  
いうのかな

もしも初撃を  
避けられて  
いなければ

貴様も無傷では  
なかっただろうが

倒れていたのは  
私だった

いや  
どちらに  
せよ

私は  
倒れるのか

この勝負  
引き分け



儂<sup>わし</sup>の

勝ちだ。





髪を踏まないよう  
気をつけなまや。











どうやら  
問題はないな

前の器との  
ギャップには  
戸惑うが…

げげげ

カラ

カララ



まあ  
百年以上酷使した  
前の肉体と  
十代の肉体

ギャップはあつて  
当たり前か

儂のことだ  
すぐに慣れるで  
あろう

むしろしばらくは  
力の制御に  
気を使わねばの…



もつとも  
四年先んじた分  
サイズだけは  
どうにもならんな

やむをえん  
このたびは少女の肉体に  
甘んじるとしよう—

ん。  
そう言え

儂をこの身体に  
追い込んでくれた  
功労者はどうなったの  
かのう—

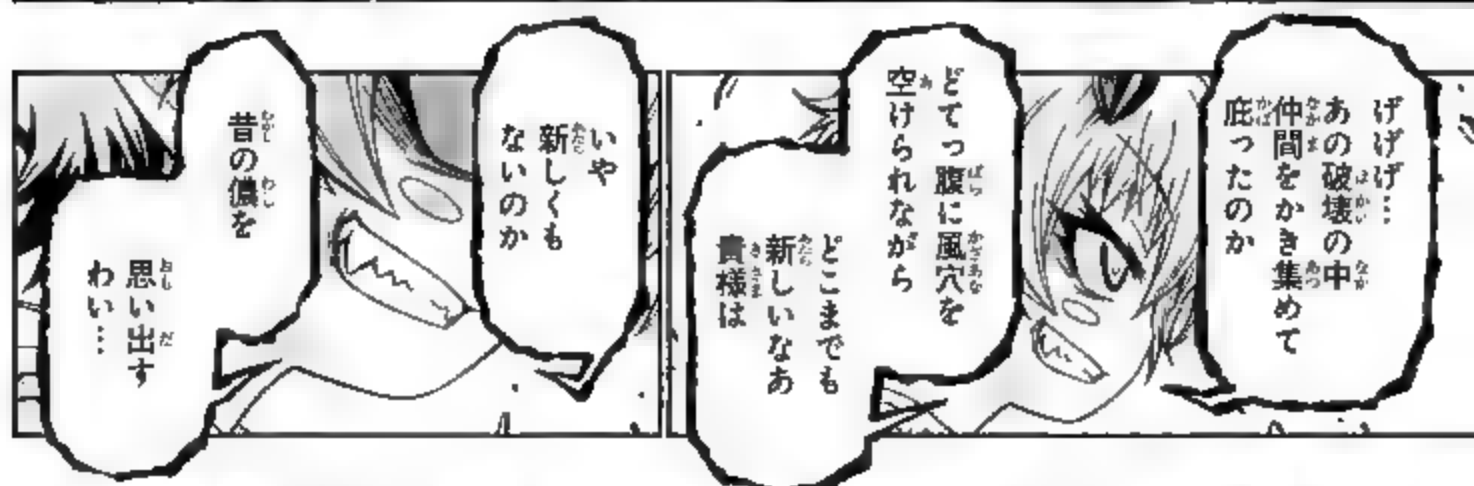
カララ



しらぬい  
不知火……

はあ……  
はあ……

言彦……



げげげ……  
あの破壊の中  
仲間をかき集めて  
底ったのか

どてっ腹に風穴を  
空けられながら

どこまでも  
新しいなあ  
貴様は

いや  
新しくも  
ないのか

昔の僕を

思い出す  
わい……



……  
一緒にするな！

約束を破り！  
少女の身体を  
乗っ取った貴様と！

英雄失格の  
貴様と一緒に  
されたくはない！



しらぬい  
不知火を返せ!!  
わたし  
私の…

わたし  
私の友達を  
かえ  
返せ!!

めだかちゃん…!?  
終神モードを  
…

黒神ファイナルを  
もう一度…!?

無茶だ…  
めだ姉

人窟も傳まり!  
風穴も空いて!

二回もできる  
技じゃない…!

乗っ取ったとは  
人間きが悪いな

それに  
返したくとも  
返せんよ

これはもう僕  
獅子目彦でしか  
ないのだから

やかましい!  
それは

それは  
しらぬいはんそで  
不知火半袖だ!!







先刻晒した醜態から  
すれば致し方ない  
こととは言え

獅子目言彦も  
軽んじられた  
もののだの

同じ技を二度も  
使用されるなど…





げげげ  
絶望したか？

絶望したようだな  
げげげげ



そう

今やその  
黒神ファイナル  
とやらは

僕にとつては  
攻撃ですら  
ない

だから  
跳ね返すまでも  
なかった

だから優しく  
受け止めて  
やった

貴様は今や  
僕の敵では  
ないのだ



まあ  
そうは言っても  
黒神めだか

貴様ほど  
獅子目言彦相手に  
善戦したやつはおらん

その傷で  
生き延びることが  
できれば

またいずれ  
相手になって  
やろう

いい勝負  
だった。

今僕にあるのは  
そんな爽やかな  
感慨だけだ――

!?



待て！

聞こえのいいことを  
言って逃げるな！

ちゃんと私と  
最後まで戦え！！

「……」

「なんだ」

「なんなんだ  
こいつは」

「諦めるに足る  
絶望はくれて  
やっただろう」

「その上で  
実力も認めて  
やっただろう」

「メンツは顔は  
立ててやったはずだ  
体裁は世間体は  
繕ってやったはずだ」

「なのになぜ  
この期に及んで  
戦おうとする？」

「こゝは潔く  
負けを認めるのが  
理想的な英雄像  
だろうが」

「なのに  
どうしてこんな  
すがりつくような」

「みっともない  
真似をする？」

「大方壊れた両腕を  
スタイルとやらで  
振動させて  
動かしているのだろう」

「この際いっそのこと  
五体を碎いてしまおうか」





「いや」  
「無駄だな」

「心臓が停まっても  
戦い続けるような  
少女だ」

「五体を砕いても  
関係あるまい」

「砕くべきは  
ならば」

「肉体ではなく  
心」



「砕くべきは  
ならば」

「あれらか」



!!

貴様言彦  
何を考えている!

やめろ!

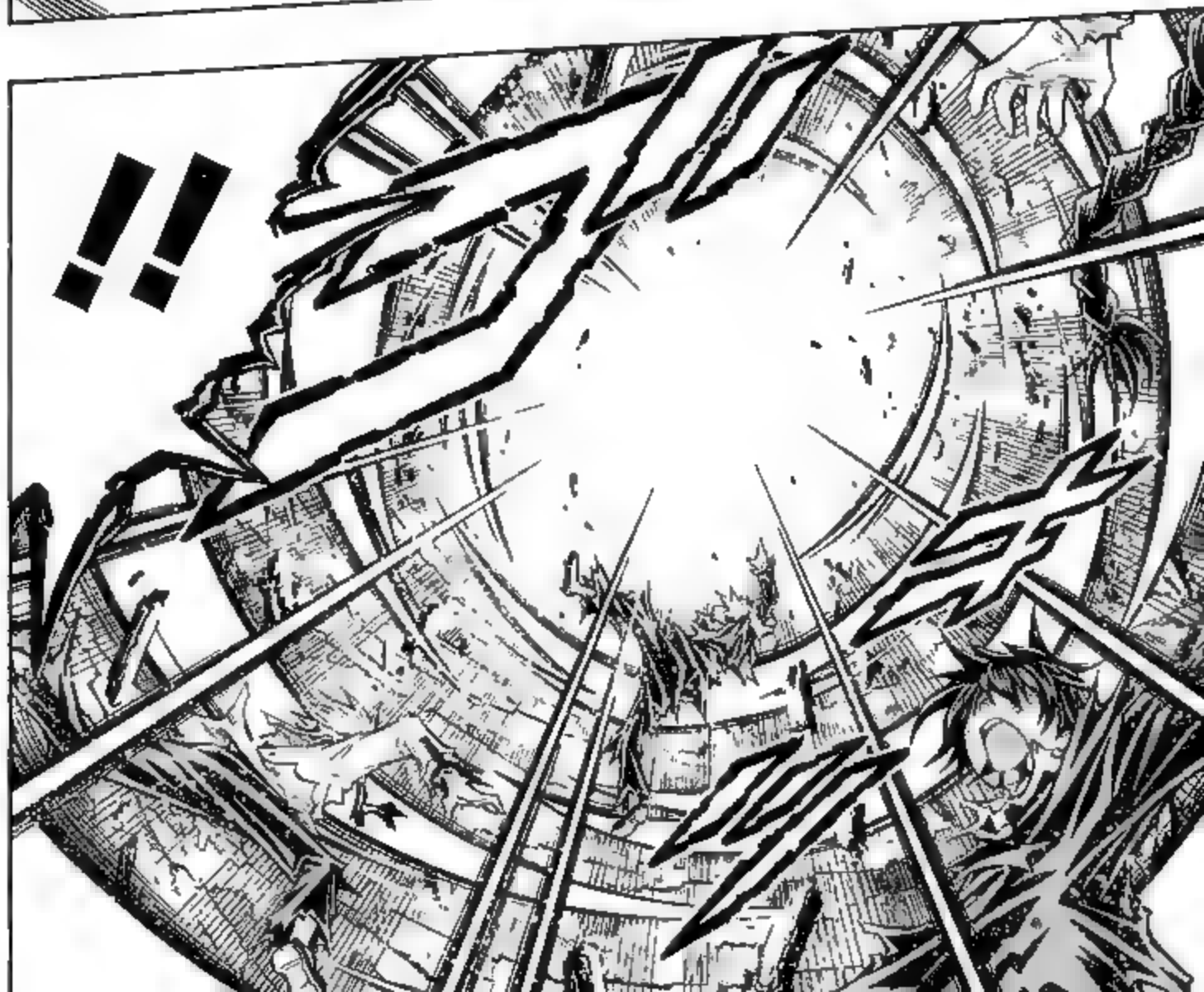
そんな真似は  
私が許さん!!

げっげっげっ……  
黒神めだか  
貴様は

「空気の壁」に  
「ぶつかると」の  
「ぶつからない」だの  
えらく忙しかった  
ようだ

儼ならその「空気」を  
「ぶつける」ことが  
できるのだぞ?

こんな  
風力に！





「…そうだ」  
「それでいい」

「颯爽と儼を  
帰らせろ」

「英雄は守るものが  
あってこそ英雄」



「仲間も友も  
恋人も」

「土地も世界も  
愛も信頼も  
失って」

「それでも  
戦い続ける  
ことなど」

「この儼にさえ  
できなかった」

「それができたら  
もう人間じゃあ  
ない」

「全知全能」  
「安心院なじみ  
同様の」

「人外でしか  
なくなるだろう」

「やれやれムキに  
なってしまったな」  
「だがまあ  
よからう」

「もとより今の儼は  
生きるだけが  
目的の」

「英雄にあらざる  
者なのだから——」





a-zmanga.com



いい加減に  
しろ!!

往生際が悪いぞ  
だらだらと

戦いを汚すな  
この化物め!!

化物め化物め  
化物め化物め!

貴様の負けだ!  
負けなんだよ!

その手を離せ  
鬱陶しい!





じゃああとは  
黒神があのまま  
勝手に殺しにされて  
終わりだね

結局黒博士も黒神も  
言彦相手にいいとこなしの  
完全敗北ってわけだ…

…  
そうですね

私達はこのまま  
死んだ振りで  
やり過ごしますか…

ふん

いいとこなしは  
私達も同じ  
だったけどね

まあ  
いいか

そこそこ  
面白かったわよ  
私は

そうですね？

私は

つまらなかった  
ですとでも

徹頭徹尾  
とてとても

特にこの終わり方は  
はなはだ不快ですね

言彦がああやって  
怒るのも  
無理ありません

めだか様の行動は  
最早

常軌を逸して  
人知を越えているとしか  
言えないでしょう

第一めだか様が  
もっと早い段階で

不知火さんを  
諦めていれば  
ここまでのことには  
ならなかった

そりゃあ友達  
は大切にしよう

だけど  
その友達を  
守るために

すべてを失うなんて  
何かなんだか  
わからない

全体と部分の  
区別がつかない  
本末転倒です……

それこそ  
友達なんて  
空気みたいな  
ありふれてるのに

いーじやないですか  
沢山いるんだから  
一人くらい……

まるで末期の  
ギャンブラー

負けを  
取り戻そうとして  
結果何もかもを  
なくしてしまった……

欲が深過ぎるん  
ですよ  
要するに……

破滅的というか  
壊滅的というか  
私には理解不能な  
生き方です

拳を交わそうと  
言葉を交わそうと  
最後まで

私には  
めだか様のこと  
わかりませんでした  
……

わかんない  
かなあ。

それが  
わかんない  
から

私達  
は  
負けたん  
だよ。



いやあそれが  
仲間でも友達でも  
ないんだなあ

私は  
あんたと同じ  
守るものがない

なんとなく  
生きてるだけの  
奴だよ

…その  
生きてるだけの奴が  
なぜこの邪魔をする！

貴様！

貴様一体  
何が狙いだ！？

受け狙い。





ただ  
おちんのお陰で  
死なずに着んだって  
言っても

私をこんな修羅場に  
運んできたのが  
おちんなんだけだね

そりゃん苦しい  
わけだ……



ああ

死んだ

今度こそ

今度の  
今度こそ  
死んだなあ

第182箱  
「言葉は届く」

真っ暗だ  
真っ黒だ  
なにも見えねえ

四方八方  
完全なる闇だ

天国でも地獄でも  
あの世でもない  
ただの闇

もちろん  
中学校の教室  
でもない

カッ！  
なるほど  
これが死ぬって  
ことかよ

何も見えねえ

何も聞こえねえ

さみしいなあ  
さびしいなあ

おいおい何を  
言っているんだよ  
人吉くん

まさか俺達の声も  
聞こえないと  
いうのかい？

…ん？

誰だ？

頑張つてよ人吉！  
ここで倒れたら  
お前じゃないだろう！

しゃんとしな  
善吉くん——僕に  
もう一度鍛え直して  
欲しいのかな？

ケケケ！  
所詮そんなもんかよ  
アメーの正しさは？

バケモン女の下働きで  
終わってんじゃねーぞ  
がっかりさせんなや

誰の声だ  
わからねえ

何死んでんだ善吉ちゃん  
——俺をこれ以上  
不幸にする気がよ

ここで死ぬような  
きみじゃあ  
とつくに僕に  
殺されているさ……

うるさい  
なあ

静かにして  
くれよ……

情けない！  
それでも私の  
上司ですか  
人吉会長！

学園の外で  
勝手に死ぬなんて  
不愉快です！！

大丈夫！  
命がなくても  
夢と希望が  
あるじゃない！

大丈夫！  
私が好きになった  
人吉くんだもん！

俺はもう  
眠いんだ……

どないしてんな  
ジブンまだ  
凡才の持ち味  
出してへんやろ

やれやれ  
ざまあねーなあ  
人吉くん

「めだかちゃんに勝つ」と  
僕に跋阿を切ったときの

あの威勢のよさは  
どこへ行ったのさ?



え?あれ?  
なんだ  
どういう状況だ?

俺は言彦に  
殺されたんじゃ  
なかったのか?

今度こそ  
死んだと  
思ってたのに!

どころか  
不知火の里で  
言彦にやられた  
怪我までが治って...

まさか今までのことは  
思春期特有の妄想!?





んなわけ  
ないでちゅ  
ぼーか

あたちのスタイル  
「童謡使い」で

きみの死体を2日ほど  
若返らせただけでちゅ  
よーん

はあ

はあ



弄常套…  
ああ

そうか  
お前のスタイル  
か

そういや  
眼鏡まで  
戻ってるな…

確かに「童謡」なら  
言彦の破壊も  
直せるけれど

だけどお前のスタイルって  
死体にまで通じるの  
かよ…

そうみたいね…  
あたちもやったのは  
初めてだけど



っていうか  
俺の生死なんか  
どうでもいい！

めだかちゃんは！  
不知火は！言彦は  
どうなったんだ！？

あーもう  
騒がちなあ

生き返らせるんじや  
なかったよ  
きみなんか





なっ…!!  
賢波が!

賢波が言彦と  
互角に戦って  
いるのだとあ——っ!?

すごいね  
さすがは僕達私達の  
賢波さん!

結局みんな最後は  
賢波さんにおんぶにだっこ  
だもんなあー!



ぺーかー



え!? 何賢波  
お前双子だったの!?

感だろ  
お前みたいなのが  
この世に二人も  
いるのかよ!!

あー  
違う違う

私は双子じゃないし  
あれは私じゃないし

ほら  
よく見なよ

お前に仕掛けてる  
わけじゃないから  
目を凝らせば  
見えるはずだよ





ある言葉を概念の  
近き他の言葉に  
置き換えることを  
「換喩」という

たとえば…

箱庭学園において「十三組」と  
言うとき、それは  
「十三組に属するアブノーマル」を  
意味する。  
「言葉使い」と言えば  
全分家代表と互換可能。

転じて杠さんは  
己という概念を  
同属性の別の概念に  
置き換え—

言い換えることが  
できるんだ

言い換えるって…  
なんだよそりゃ  
滅茶苦茶な…

いや

そう言えば箱庭学園にも  
それに近いことが  
できる人がいたな

行橋未造/時計塔地下で  
行橋先輩がめだかちゃんに  
化けていたことがあった…  
普通の特技とは言ったけれど

あれは共感能力の高い  
あの人だからこそできる  
「普通」だったのか…?

だ…だけど  
なんで杠の奴  
そんなことしてんだ?

費波になるくらいなら  
死んだほうがマシというのが  
人類の共通認識だろ?

人吉  
お前にはあとで  
話がある

なに  
簡単だ

今言彦相手に  
時間稼ぎができるのは  
「逆説使い」の私だけ  
だからね

だから杠さんは  
私になるしか  
なかったのさ

逆説使い

なんだよ  
説明はいらない  
だろ？

お前は漆黒雲で  
軽く体験  
しているわけだし

いや  
そうじゃなくって  
逆説使いなら  
お前がいるのに  
どうしてわざわざ  
杠が…

そもそも  
時間稼ぎって…？

私がお前に『逆説』を  
伝授するまでの  
時間稼ぎだよ

人吉

そしてお前が  
言彦を倒すんだ

そのまま  
動くな

スタイルつてのは  
バターンだ

振動として—  
伝えることができるんだ

共振作用

いやなんで  
俺なんだよ

それこそ別に  
俺が使わなくても…





無理だよ  
だって

お前以外は  
全員死んでる  
もん。



ごめんね  
あたちも  
死にかけでさ

喉が枯れちゃって  
音量不足で

きみちか若返らせ  
——生き返らせられ  
なかった

なけなちの  
声を振り絞って

なんとかきみ一人を  
生き返らせたんだ

じゃあより一層  
なんで  
俺なんだよ

一人しか枠が  
なかったって  
いうんなら

俺じゃなくて  
めだかちゃんや球磨川を  
蘇生させたほうが  
絶対によかったじゃ…



そ…それに賛波！  
第一俺に伝授しなくても  
——伝導させなくても！  
本家本元であるお前が  
使えばいいだろうが！！

因果や優劣！  
上下や強弱を  
逆態接続する

『だから「そ」の  
逆説とやらを！！』

事実紅は  
お前に「互換」したことで  
ああやって戦えて  
いるじゃねえか！

だったら  
ここは  
お前が…



無理だ

わたし  
私には



私はなんとなく  
生きてるだけの奴だ

主義も志も夢も  
希望も思想も  
大切なものも  
守りたいものもない

こうして奥博士から  
反則級のスタイルを  
伝導されて  
いるけれど

私は生煮  
煮え切らない子

今はたまたま  
お前達に協力的な  
気持ちになってるけど

5秒後には  
気持ちが変わってる  
かもしれない



歪んではいても  
強い愛情があった  
奥博士ならまだしも  
そんな私じゃあ  
言彦には勝てない

いや

勝つちやあ  
いけないんだよ

私みたいな奴が  
世界を救っちゃあ  
駄目なんだよ

世界は  
お前みたいなの

意志のある奴が  
救うべきなのさ

黒神や球磨川じゃなく  
お前を蘇生させたのは  
お前が一番「逆説」を使える  
可能性が高いからだ

言彦が乗っ取った  
あの肉体の  
持ち主

不知火半袖の  
気持ちを知る  
お前が

ご存知の通り  
相手の気持ち  
がわからないと  
届かないからね

言葉は

ぽきゅ

るん

荷が重い

そんなの  
俺にだって  
無理だよ

いくら  
スタイルとやらを  
伝導させられ  
ようと

めだかちゃん  
が勝てなかつた奴を  
俺なんかが...

世界なんて  
俺にだって  
救えねえよ

俺なんて本来  
この場の誰とも  
口が利けないような

普通の奴  
なんだよ...

情けないこと  
言わないで  
欲しいでちゅー

荷が重かろうが  
軽かろうがどうせ  
きみはこのあと  
死ぬんだから  
死ぬ気でやれば  
いいじゃん

え？

効果<sup>こうか</sup>が切<sup>き</sup>れたら  
きみは死<sup>し</sup>ぬよ  
元<sup>もと</sup>通<sup>と</sup>り

人吉くん

今はまだ世界なんて  
救わなくてもいい

し、ふい  
だけはまだ  
不知火ちゃん

ああして生きて  
いるんだから

賢波

お前まへ一体いったい

ほんとうに  
本当に  
何者なんだ……？

きみが思おもい出だせないなら  
誰だれでもないよ人吉ひとよしくん

だ<sup>れ</sup>だ<sup>れ</sup>ぞ<sup>ろ</sup>ぞ<sup>ろ</sup>  
思<sup>おも</sup>ひ<sup>だ</sup>し<sup>て</sup>  
欲<sup>ほ</sup>しい<sup>も</sup>の<sup>だ</sup>ぜ

餓が。

はなにも  
果たして何者で  
だれ  
誰なのか――

!?まさか!

お前  
あんた!!

あんしんいん  
**安心院さ**





阿久根先輩…

そうだ  
これは…

阿久根先輩の  
声だ…

そうだよ  
今のお前なら

きっと世界だって  
救えるよ！

全財産  
賭けたって  
いいもん！

喜界島…

おいおい  
やめてくれや

全財産は  
張り込み過ぎだろ

よし  
ここから  
根性見せろや  
善ちゃん

倒れたときこそ  
立ち上がる  
チャンスだろ

うん  
それでこそ

めだかちゃんを  
任せるに足る  
男だよ

ケケケ！  
立ち上がる以上は  
戦えよ

テメーの正義を  
貫きな

せやな  
卑怯な手でも  
なんでも使て

英雄が相手でも  
なんでも  
勝ったったら  
ええねん

はい…  
そうですね

名瀬師匠  
真黒さん  
雲仙先輩  
鍋島先輩

いつも叱咤激励  
ありがとうございます  
ございます

人吉くんなら  
絶対に  
勝てるよ！

早くみんなと  
帰ってきて！

絶対に勝てるって…  
お前は無茶ばっか  
言うなあ江迎…

大丈夫！あなたなら  
また生き返れますよ  
人吉会長！

また生き返れるとか  
言うなあよ  
虎居庶務

お前は本当に  
楽観的で真っ直ぐな  
奴だぜ

ええ  
もちろんです  
宗像先輩

そつだ—  
僕に殺せないきみが  
他の誰かに殺される  
わけがない

さあ！  
風紀を乱す悪者を  
やつつけてください  
人吉くん！

当然だ  
風紀は守らなきゃな  
鬼瀬

ほら見ろ  
お前は最初から  
黒神なんて  
越えてんだよ

鹿屋先輩  
だからあんたは  
俺を買いかぶり過ぎ  
なんですよ…

よく立ったね！  
さあ！  
今こそ変身の  
ときだ！

カツ…今回ばかりは  
それもいいかもな  
与次郎

みんなの声が  
聞こえる  
みんなの言葉が  
聞こえる

ああもちろん  
幻聴だ

今までみんなから  
聞いた言葉が  
都合よく編集されて  
リフレイン  
されているだけだ

だけど  
それでいいんだ  
みんなの言葉が

俺の中にある  
確かにある

それだけで  
俺は

戦える!!

言葉は

届く!!









人吉善吉は  
父親を知らない

自分を育てるために  
家事に仕事に懸命な

母親の背中だけを  
見て育ってきた



第183箱 『心と共にあるような』

聞けば  
凡庸な男だった  
という

その凡庸さゆえに  
非凡な母に  
恋をして

そしてその  
凡庸さゆえに

非凡な母から  
逃げ出したようだ



既に黒神めだかを  
知っていた人吉少年は  
それを聞かされても  
父親を恨む気には  
なれなかった

なんだったら  
大好きな母親と  
二人きりに  
してくれた父の

現在の多幸を  
お祈り申し上げる  
くらいだった

だけど  
そんな凡庸な  
父を思うとき

凡庸な我が身を  
省みていつも  
彼はこう誓う



「俺は俺の  
凡庸を」

「誰かの非凡の  
せいにはしない」

第183箱

「心と共にあるような」

「非凡な  
奴らから」

「凡庸な  
俺から」

「俺は決して  
逃げないぞ」







お…おとお  
避けてる…  
ちゃんと避けてる

あの言彦の  
攻撃を…

肉体が刷新  
されてる  
言彦と

あいつちゃんと  
戦いになってる  
じゃない…

刷新されてる  
からこそだよ  
常套さん

今の言彦の肉体は  
不知火半袖のもの  
なんだもの

だから人吉には  
言彦の動きが  
言彦の気持が  
読めるのさ

…  
ただし

「わかる」だけじゃ  
さっきの黒神と  
同じだ

スタイルの使い方  
としてはまだ半分  
なんだけどね…

あなたが  
噛みつかれたとかいう  
全吉モデルとやらを  
使ってみればよいのでは？

それは反対に  
相手の肉体が  
不知火だからね

「正喰者」で作られた  
全吉モデルは  
使い道がないんだよ

いいことばかり  
じゃないですね…  
となると厳しい

避けてるだけじゃ  
私と同じで  
ジリ貧ですわ…

…いや

でもほら見て  
二人とも

なんだか

苛立つてるみたいよ  
言彦の奴

「なぜだ」



「なぜだ」  
「なぜだ」

「黒神めだかといふのならはまだわかる」

「先刻の  
杠かけがえでも  
まあいいだろう」



「この獅子目書彦には  
遠く及ばないにしても」

「奴らはそれなりに  
非凡な  
選ばれし者だった」

「だがなぜ！」  
「どうして！」  
「こんな顔も名前も  
憶えられんような」

「特に見るべきところのない  
凡庸極まる男に」

「僕が苦戦せねば  
ならんのだ!」

「群れをなした  
軍隊でもない  
たった一人の  
凡人に——」

「いや」

「この男本当に  
一人なのか？」



「先刻来から  
この男」  
せんこうらい  
おとこ

「まるで  
見渡す限りの」  
みわた  
かぎ

「心と共に  
あるような」  
こころ  
とも





.....  
!!!

「これが苦なのか」  
「安心院なじみ  
これが」

「貴様が命を捨ててまで  
守ろうとした  
もののなか」



人吉くんの  
蹴りを避けた...

黒神ファイナルさえ  
今や避けない言彦が...

わかるんでしょ  
直感的に

自分に通じる  
攻撃って奴は

連発的に  
通じる攻撃...

も  
やっぱり

当たらなければ  
意味がない...

腐<sup>くさ</sup>っても  
英雄<sup>えいゆう</sup>だ

次元<sup>じげん</sup>を越<sup>こ</sup>える  
スタイルにすら

言<sup>い</sup>彦<sup>ひこ</sup>は早<sup>はや</sup>くも  
対<sup>たい</sup>応<sup>おう</sup>しつつかある…

これ<sup>これ</sup>は…  
駄<sup>だ</sup>目<sup>め</sup>かな

人<sup>ひと</sup>吉<sup>よし</sup>に託<sup>たく</sup>した  
逆<sup>さか</sup>説<sup>せつ</sup>のリズムは

文<sup>い</sup>字<sup>じ</sup>通<sup>とお</sup>りの  
付<sup>つ</sup>け焼<sup>や</sup>月<sup>げつ</sup>だ

私<sup>わたし</sup>の振<sup>しん</sup>動<sup>どう</sup>で  
あいつの身<sup>からだ</sup>体<sup>たい</sup>を  
共<sup>とも</sup>振<sup>しん</sup>させただけだから  
時<sup>じ</sup>間<sup>かん</sup>が経<sup>た</sup>てば当<sup>とう</sup>然<sup>ぜん</sup>  
振<sup>しん</sup>動<sup>どう</sup>は弱<sup>よわ</sup>まる

そうなつたら  
も<sup>も</sup>う逆<sup>さか</sup>説<sup>せつ</sup>も  
逆<sup>さか</sup>接<sup>せつ</sup>もな<sup>な</sup>い

順<sup>じゆん</sup>当<sup>たう</sup>に予<sup>よ</sup>定<sup>てい</sup>調<sup>てう</sup>和<sup>わ</sup>な  
敗<sup>は</sup>北<sup>ほく</sup>を喫<sup>く</sup>するだけだ…

カッ!


確<sup>たし</sup>かにこのままでは  
人<sup>ひと</sup>吉<sup>よし</sup>善<sup>ぜん</sup>吉<sup>きち</sup>の敗<sup>は</sup>北<sup>ほく</sup>は  
必<sup>ひつ</sup>至<sup>し</sup>だつた

互<sup>たが</sup>いに  
当<sup>あ</sup>たれば終<sup>しゆう</sup>わりの  
決<sup>けつ</sup>定的<sup>ていてい</sup>な一<sup>いつ</sup>撃<sup>げき</sup>を  
持<sup>も</sup>っているのならば

タ<sup>た</sup>イムリミットのあ<sup>あ</sup>る  
彼<sup>かれ</sup>のほう<sup>ほう</sup>が  
庄<sup>さう</sup>倒<sup>たう</sup>的に不<sup>ふ</sup>利<sup>り</sup>なのだから

しかし





それでも  
彼は

逃げない！

!?

なにやってんだ  
あいつ…今のは  
避けれただろ!?

まさか気持ち  
切れたのか!?

プレッシャーに耐え切れず  
早く楽になりたいくて…

いえ違います  
今のは…

今のはわざと  
喧らったんです!!

獅子目言彦が  
世界に与えたダメージは  
その後決して回復しない

受けたダメージは  
二度と元には戻らない

それを知れば  
誰だって

言彦の攻撃を  
避けようとする

避けられないまでも  
避けようとはする

少なくとも  
回復不能な攻撃を

あえて喰らうなんて  
選択はありえない

たとえ  
そうすることで  
言彦の

虚をつけると  
わかっていても。

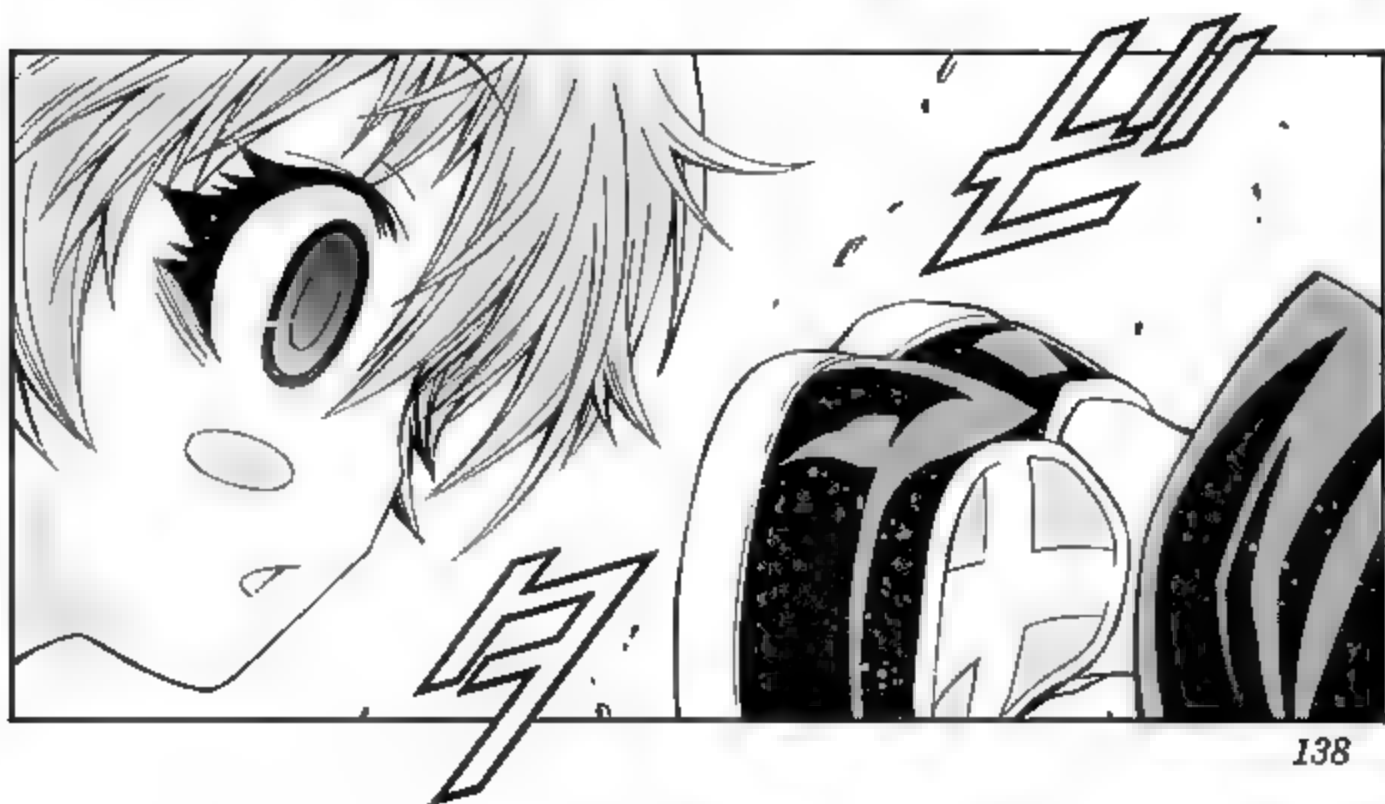
だからこそ

喰らってやったぜ  
獅子目言彦！

逆！

説！！

的にな!!!





貴様には  
懺れんだろうよ  
親友は

げげげ  
そうだろう  
そうだろう



.....  
やられた...

言彦の奴  
ほんの瞬間だけ  
肉体の支配権を

不知火に  
戻したんだ...

千載一遇の好機を  
ものにできなかった

終わった...

人吉の負けだ  
.....



げげげげげげ  
げげげげげげ

儂の攻撃を避けんとは  
新しかったぞ!!!

折角だ!!!

その新しさをもつと  
味わうが良いわ——っ!!!







ばーか

その一瞬を  
狙い澄ますのが

俺の親友  
不知火半袖だぜ

……!!  
半袖の意識が  
闘の拳を止めたとい  
うのか!?

まさか貴様……

わかってたのか  
こうなることが!!

わかってた

んじゃねえよ

俺が今まで  
不知火と

どれだけ言葉を  
交わしてきたと  
思ってた

わかり  
合ったのさ。

それが言葉の  
真髓だろ。





ふぎけるなよ  
半袖！

儼がどれだけ  
貴重で！希少で！  
珍しく！類を見ない！  
保存すべき唯一なのか！

貴様も不知火なら  
わからんはずが  
なからうが！！

こんなことをすれば  
貴様も無事では  
済まんのだぞ！！



何を黙って  
おるのだ

善吉よ

勝者の義務だぞ  
名乗りをあげて  
引導を渡してやれ

ああそれから  
折角だから  
言っておけよ

ほら  
なんだっけ

私の幼馴染は  
どんな風に  
格好いいんだっけ？



めだかちゃん…

儼は！

儼は  
獅子目彦彦！！

歴史上  
ただひとりの！  
たったひとりの！

五千年生き続けた  
伝説の英雄だぞ  
おおおおお！！



そうかい  
おれひとよしぜんきち  
俺は人吉善吉——  
一人ぼっちじゃ  
一秒だって  
生きていけない

デビルかっけえ  
高校生だよ。









終わ、え：  
人吉の負けだ  
……

これは  
ギョゲかな……？

わかりません  
ギョゲに見せかけん  
シリアスに見せかけた  
ギョゲかも。



呼んだか？



用事なら  
ちよっと  
待ってくれ

今髪を  
結ってる最中  
なのだ

え…!?

みんな…  
どうして!?



ふふっ  
言っておくけど  
幽霊じゃないよ

ほら！  
ちゃんとついて  
足があるだろっ？

お前よく  
恥ずかしげもなく  
そんな工夫のない  
こと言えるよな…

別に私達  
「みんな」の枠に  
入ってませんしね…

どうして  
生きてるの…？

言彦の破壊は  
不可逆のはず  
なのに…



私にも詳しくは  
わからないのだが…

どうやら百彦が  
消滅したことで  
その不可逆が  
可逆になったようだ

ゆえに「五本の病爪」による  
蘇生がぎりぎり  
間に合ったわけさ

そんな…  
倒したら効果が  
消えるだなんて…

それじゃあ  
まるで…

スタイル…!!

そうだね…まあ  
全く一緒じゃなくとも  
似たようなものでは  
あったのかもね

次元を超えて  
伝わる言葉…  
次元を超えて  
繋がる言葉…

だとすれば  
それも随分  
皮肉な話だけれど

誰よりも強い  
孤高の英雄  
ただ一人の存在

獅子目百彦こそが  
誰よりも強く  
コミュニケーションを  
望んでいたなんて…

…とにかく  
ありがとう

みんなのお陰で  
あたしは…

カツノ  
おいおい不知火  
ありがとうはねえだろ

勘合いねーよ  
それともお前は  
家に帰ったとき  
ありがとうって  
言うのかよ?

そうだね

ただい——

ピルルルル!

「あ」  
「ごめん  
また僕だ」

「構わず  
続けといて」

.....

……帯さまから  
かな?

かもしれませぬ  
恐らく

言彦が倒された  
ことに気付いたの  
でしょう……

「うんわかったよ  
武器子さん」

「めだかちゃんに  
代われば  
いいんだね?」

武器子さん!?

武器子さんって月水会の  
兎洞武器子さん!?  
見境ねえ!!

球磨川 お前  
月水会ともアドレス  
交換してんの!?

ほうほうの女子と  
アドレス交換しまくって  
一体お前の何が  
マイナスなんだよ!!

ご無沙汰だな  
武器子さん  
——ん?

なんだか  
通話が遠いな

どこからかけて  
おるのだ?  
海外か?



ご名答  
海外です

相変わらず  
鋭いですね  
めだか様

正確には  
赤道直下黒幕島——  
黒神宇宙開発センター  
ですよ

そんなに  
前の話じゃ  
ありませんし

もちろん  
ご記憶  
ですよ?

ああ憶えておるとも  
漆黒宴決勝の  
舞台であろう?

あのときは  
貴様の顔に  
泥を塗ってしまった  
申し訳なかったな

ああいえ——  
そのことは  
もういいんです

ただここが  
決勝の舞台に  
なったのは

あくまで偶発的な  
展開だったの  
ですが……

?

ああそうだったな  
元々決勝……というか  
漆黒宴の三次会は

荒唐無稽にも  
月で行われる  
予定だったとか——

はい  
その通りです

で……  
なんと……

結局は使用されなかった  
その三次会会場のお月様なのですが——

現在地球を  
目掛けて

超高速で  
落下中です。





博士は再び目的半ばで死ぬときは全人類と心中するつもりだったのだ

思い通りにならない世界はいらないというあの変態らしい発想だが

事実上地球を人質に取っていたようなものである

ゆえに吾輩は奴の思惑に乗っておったのだが……

それにしては気がつけろよ！我が息子

お前の命は地球より重い……お前の命は地球より重いんだぞ

言いにくい話ではあるが……

聞けば汝は黒神家の家長を継いだそうだが

ならば吾輩が今なぜこんな話をしておるかわかるであろうな……

……もちろんわかるとも

わかっておる黒神家の家長は

死ぬのも大切な仕事のうちだ

私の現在地は箱庭病院跡だ今すぐ迎えを寄越してくれ

それから一人乗りのロケットの準備だ——できるだけ早くできるだけ早くだ

ああうん

当然帰りの燃料は積まなくてよい

ちよ……めだかちゃん!?

なに何をする気だ!?なに何を考へてる!?

!?

お別れだ  
貴様達

ちよつと月を  
壊しに行く

どうやら  
戻れそうに  
ない

学園のみんなには  
よろしく言って  
おいてくれ

孝行したい時に  
親はなし——  
というが

まさか暴博士を  
全人類を殺した  
極悪人にはでさん

娘としてできる  
最初で最後の  
親孝行だ

臺の上では  
死ねんと  
思っていたが

しかし  
月か

まあ…比較的  
悪くはない  
死に場所だよ

ふ…ふざけんなよ  
命を粗末に  
するなつて

死んで花実が  
咲くものかつて…

言ってただろうが  
めだかちゃん!!

大体俺達が  
お前一人を死なせる  
わけねえぞ!!

そうだよ!  
ここまで来たら  
死ぬときは  
一緒だよ!!

それにめだ姉!  
博士の子供だって  
いうのなら  
私だって——





「……」  
「これで  
いいんだよね」

「めだか  
ちゃん」

……  
ああ 球磨川

貴様は  
悪くない

すまんな  
奇麗ごとばかり  
言って

私はいつも貴様に  
汚れ役を押しつけて  
きた

「別に……」  
「嫌われるのには  
慣れてるし」

「それにお別れとか  
言いながらどうせ」  
「めだかちゃんは  
まーた生き残るに  
決まってるしね」



「見え見えなんだよ  
なんなら賭けたって  
いいぜ」

「めだかちゃん  
当たり前みたいに  
箱庭学園に  
帰ってきて」

「卒業式で愛しの  
僕から第二ボタンを  
受け取るのさ」

「貴様の第二ボタンか  
そりやあ欲しい」

「本当に  
欲しいなあ」

「これはもう  
是非とも生きて  
帰らんとさ」

球磨川……  
貴様とは仲が  
良かったとは  
言いたいが

けれど  
言いたくは  
ないが

貴様と会えて  
よかったよ

貴様との喧嘩が  
一番楽しかった

なんていうのかな  
もしも私に  
お兄ちゃんがいたら  
こんな感じ  
なのかなって

ずっと  
思ってた

「いやもしもって」  
「いるでしょ」  
「めだかちゃんには  
お兄ちゃん」

あははは  
はははは！

ふうっ——  
笑った笑った

涙出ちゃった

んじや——



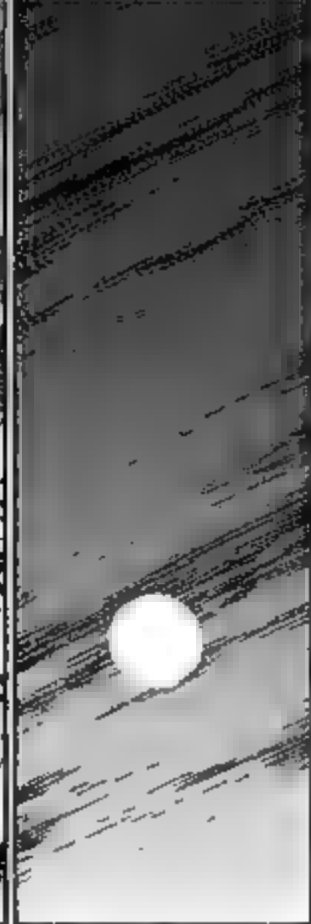
すえなが  
末永く  
しあわ  
お幸せにな！

みそぎ  
楔！



ばいばい、

にんげん  
人間。



…天が崩れ地が崩れる  
のではと気に病むことを  
「杞憂」というのだったな

なるほど  
言彦に対して諺とは—  
言葉使いらしい  
切りれだよ

確かに地球ごと  
破壊してしまえば  
言彦だろうと私だろうと  
生き残れない

さすがは  
黒博士

遺言の効力は  
まさしく  
絶対的だな…

いや…  
私だけなら  
生き残れるかも  
しれないけれど

私一人生き残っても  
仕方ないものなあ

一人は

嫌なものなあ

お母様と  
また会えるのかなあ

ははは

はは…

……





いや——  
貴様達が言うところの  
獅子目言彦は  
完全に消滅した

こちらに  
残った僕は  
ただの残党だ

悪いが  
なんの力にも  
なれん

……震えを  
止めてくれただけでも  
十分だ

すまん

みつともない  
ところを  
見せてしまった

だけど私なんて  
こんなものだ——  
かつて世界を救った  
英雄獅子目言彦とは  
違う

私はいつだって  
こわごとと  
おっかなびつくり  
虚勢を張って  
きただけだ

笑って死ぬなんて  
このざまじゃあ  
とても無理だよ……

ならば  
その英雄から  
アドバイスだ——  
怖くなったときは  
空を見て考えろ

空を見て己の人生を  
思い返すのだ

貴様の幼馴染は  
そうやって僕を  
打倒した——僕も

かつてはそうやって  
震える我が身を  
奮い立たせてきた

お前の人生は  
何かが足りない  
不完全なものだったか？

黒神めだか

お前は自分の人生に  
どうにもならない  
不満があるか？

……







ないなっ！

満<sup>まん</sup>月<sup>げつ</sup>のように  
満<sup>み</sup>ち足<sup>た</sup>りた

完<sup>かん</sup>全<sup>ぜん</sup>な人<sup>じん</sup>生<sup>せい</sup>  
だっ<sup>た</sup>たよ。



その日  
おれたち  
俺達の空から  
つき  
月が消えた

そして  
めだかちゃんは

帰って  
こ  
来なかった





すこい  
きよーだい  
だよね

姉

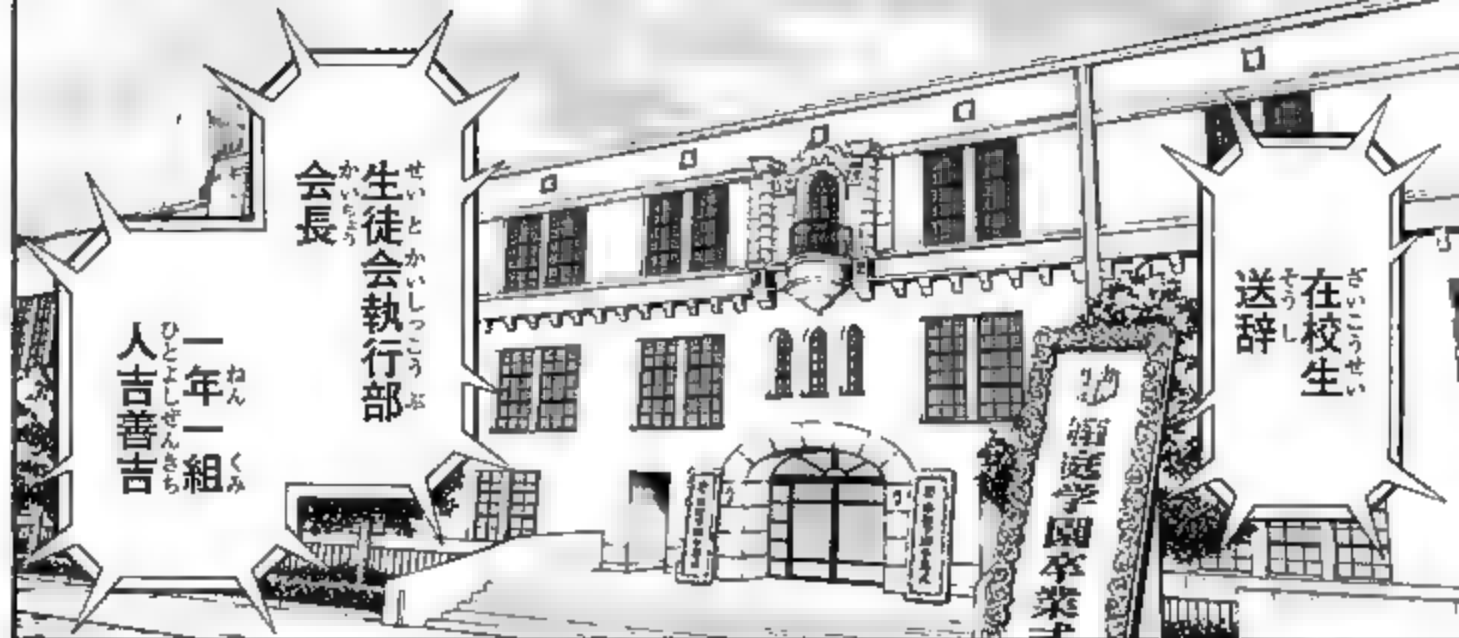
妹





第185箱

「いちたすいちは」





くろかみ  
黒神めだか

めだかちゃんの  
ことを  
話そうと。



……ちなみに  
皆さんが今胸に  
つけている花

それに  
この卒業式の会場を  
彩る花の数々は

彼女が  
生徒会長だった頃に  
育てていたのです

なんで生徒会が  
花を育てるんだと  
当時俺は  
首を傾げて  
いましたが

どうやらあいつ  
こんなことを  
企んでいたみたいで……





万難を排して駆けつけるべき  
先輩がたの門出を  
欠席するとは  
とんでもない奴ですが

まあその  
可愛らしい  
花に免じて

どうか皆さんの  
寛大な心で  
許していただければ……

ただ出席欠席って

話だと  
俺は昔めだかちゃんに  
聞いたことがあるんですよ

中学三年生の頃……  
一年前の丁度  
今頃でしたかね

「めだかちゃん  
お前どうして  
進学するんだ？」

「お前くらいの  
学力があれば  
もう学歴なんて  
いらないだろうが」

今から思えば  
俺も馬鹿なことを  
訊いたものですが

めだかちゃんは  
こう答えました——  
「知れたことだ  
善吉よ」

「私は学校に  
「1+1」の答を  
学びに行くのだ」

……ははは  
わかんない  
ですよ

俺も  
わかりませんでした  
——そのときは

まためだかちゃんが  
わけわかんねーこと  
言い出したと思いました

「1+1」なんて  
とっくの昔に  
習っただろうがって  
思いました

けれど  
そういうことじゃ  
なくて

めだかちゃんはきつと  
こう言いたかったんだと  
思います

「1+1  
=2」

ひとりとひとりが  
ふたりになる場所

それが学校  
なんだって。

ナンバーワンより  
オンリーワン

とか。優しい人は  
優しいことを  
言ってくれるけど

だけど  
そんなことを  
言える人はたぶん

たった一人  
あることの

一人きりであることの  
寂しさを知らない

だから  
めだかちゃんは  
箱庭学園に来た

ひとであ  
人と出会いに  
来た

ひと  
人と競いに  
来た

ひと  
人を愛しに  
来た

ひと  
人を学びに  
来た

誰かと  
ふたりに  
なるために。

1+1が  
2になり

3になり  
4になり

5になり  
10になり

やがて  
みんなになる

そんな風に  
人は繋がっていく

めだかちゃんは  
皆さんに出会うために  
箱庭学園に来た  
とも言える

「1+1」の  
——それぞれの  
答を訊くために

……  
めだかちゃんに  
出会ってくれたのが

あいつに  
答を教えて  
くれたのが

あなた達で  
本当によかった

もちろんそれは  
めだかちゃんに  
限った話じゃ  
なくて

俺も——俺達も、  
皆さんに出会えて  
本当によかった

この場所では皆さんに  
会えたことは  
俺達在校生にとって  
本当に幸せな出来事でした

俺達はあまり  
いい後輩では  
なかったかも知  
しれないけれど

皆さんから  
教えていただいた  
「1+1」の答は

必ず次の世代に  
繋いでいきたいと  
思います

ありがとう  
ございました！

みな  
皆さんのことが  
大好きです！

いじょう  
以上！在校生代表  
ひとよしせんきち  
人吉善吉！

ご子息は立派に育ったようだな  
瞳先生

貴殿が来賓席に  
いるわけだ——  
確かに

あの賈禄なら  
過保護の必要も  
なからうよ

……ええ  
だけど  
まだまだ

答辞を喰いかねない  
いい送辞をしちゃあ  
駄目でしょ

その辺の気遣いが  
甘いうちは  
せんっせん三流よ

心配めされるな  
我輩の読みでは  
答辞の担当者は  
煮ても焼いても  
喰えぬ奴だ

ご存知の  
続まして

卒業生  
答辞

ピミッ

三年<sup>ねん</sup>マイナス十三組<sup>くみ</sup>  
球磨川<sup>くまがわ</sup> 禊<sup>そぎ</sup>



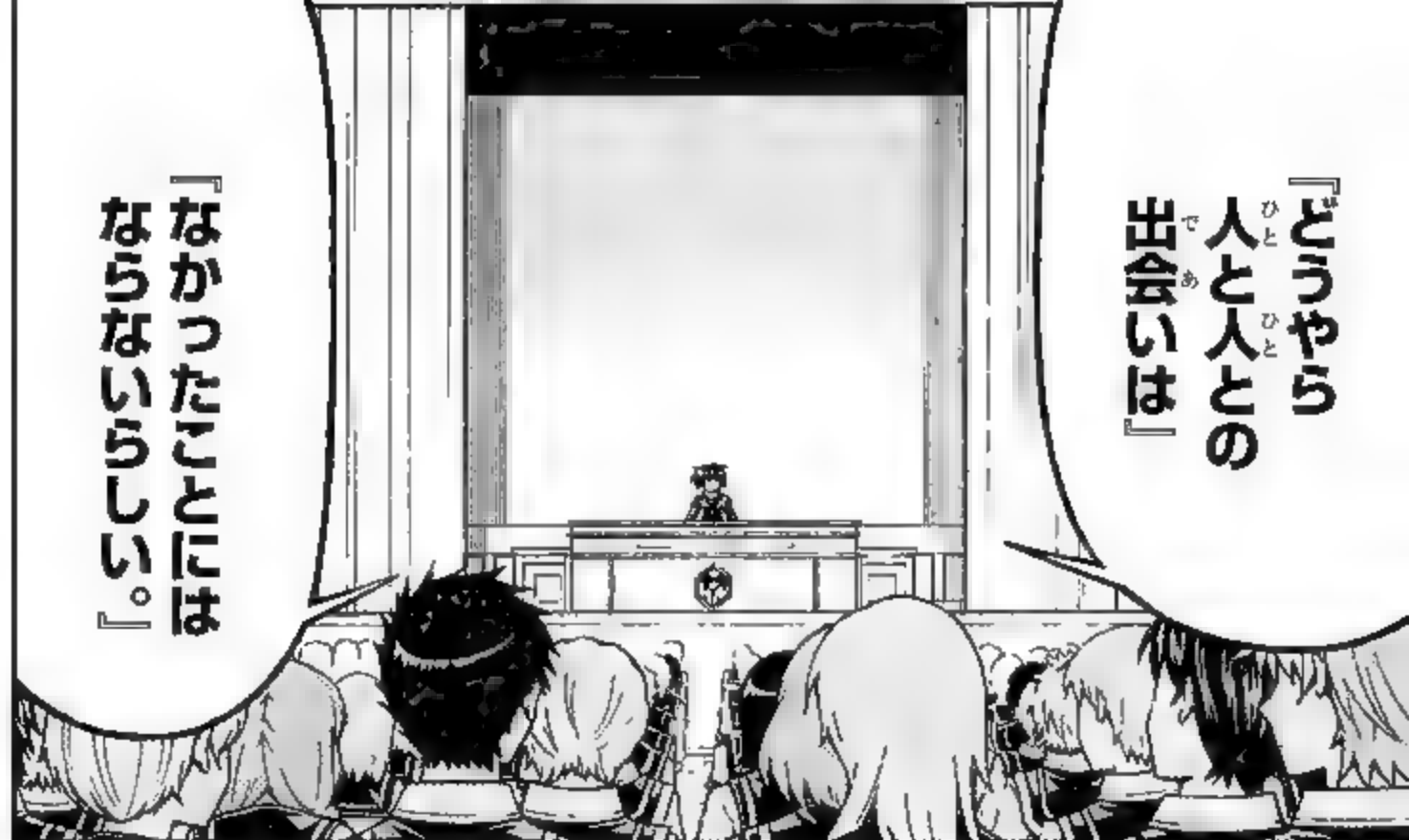






『どうやら  
ひとひととの  
出会いは』

『なかったことには  
ならないらしい。』



「きみ達とはこれで  
お別れだけど」  
「実際ご愁傷様だぜ」

「僕みたいな奴に  
出会ってしまった  
きみ達の災難も」

「この先決して  
なかったことには  
ならないとはね」

「「1+1」を  
ゼロにしかねない  
マイナスに出会う  
とは」

「きみ達も  
よくよく  
ついてない」



「だからそんな出合いを  
有効活用する方法を  
教示することで僕は」

「最初に最後の先鋒風を  
吹かせるとしよう」

「きみ達もいずれは  
この学園を卒業し  
社会へ出るだろう」

「そして挫折や  
理不尽を味わい」  
「敗北を経験し」

「自分の人生を  
最低だと思う日が  
きつと来る」

「そんな日は誰にだって  
必ず来る」  
「だからそんな日は」



『お前らなんか  
及びもつかない  
不幸な僕が』

『世界のどこかで  
逆境の中  
へらへら笑って』

『面白おかしく  
生きてることを  
思い出せ』

『大丈夫』  
『僕がこの世に  
いる限り』

『きみ達の人生は  
最低なんかじゃ  
ないから』

『大丈夫』  
『きみ達がこれから  
経験する不幸など』

『僕が十代で経験した  
不幸の割にも  
満たないから』

『大丈夫』  
『不幸な奴でも  
幸せになれるって』

『僕が証明し続けて  
あげるから』



「それでも自分が不幸のどん底だと思ふ奴は仕方ねえ」  
「いつでも僕に会いに来な」

「不幸に底なんてないってことを」

「骨の髄まで教えてやるぜ。」



「以上！」  
「卒業生代表 球磨川稔でしたー！」

「あ！  
高校は卒業してもジャンプは卒業しないからよろしくねー(笑)」

最後の最後であの人は—— //



……ふふふ

まあ  
ああでなきや

球磨川さんじゃ  
ないよなあ

そっか…あんな  
悪戯ももう  
見納めなんだ

……  
めだかちゃん  
にも

見せてあげた  
かったな——



「あはは  
実にいい答辞だったな  
名桐子だ」

本当  
ざりざり  
だったけれど

なんとか  
間に合って  
よかったよ

善吉の送辞も  
よかったぞ  
私の話をするとか  
言うから

悪口を言われたら  
どうしようと  
はらはらしたがな

おっと！不知火  
ちゃんと学園に  
戻れたんだな  
——善哉善哉

確かに  
人と人との出会いは  
なかったことには  
ならないようだ

いや私としても  
その日のうちに  
帰ってきたかった  
のだから？

月を破壊した後も  
遺難中の宇宙生物を  
助けたり  
異世界の悪魔大王  
ワルゴルドと戦ったり

光と闇の概念戦争に  
巻き込まれたりの  
冒険活劇だったのだよ

ただし遅刻した  
とはいえ  
櫻お兄ちゃん

これ、賭けは  
私の負けだな

「めだかちゃんは  
まーた生き残るに  
決まってるしねー」

「なんなら  
賭けたつでいいぜ」

「は……はは  
「ほおら  
どうだい」

「面白いだろう  
僕の人生は——」

しかしすぐに  
リベンジするから  
桐子に乗るでないぞ

やっ  
と  
勝<sup>か</sup>  
て  
た。  
。







ちう



ふん

なじみの意志を  
継いだだけだ

それにしても意外でしたよ  
半纏さま——あなたが月まで  
めだか様を助けに行くなんて

あなたはそこに  
いるだけの人外では  
なかったのですか？



それに僕の  
破壊が可逆と  
なった以上

あの女のことだ  
そのうち  
ひょっこり  
帰ってくるぞ...

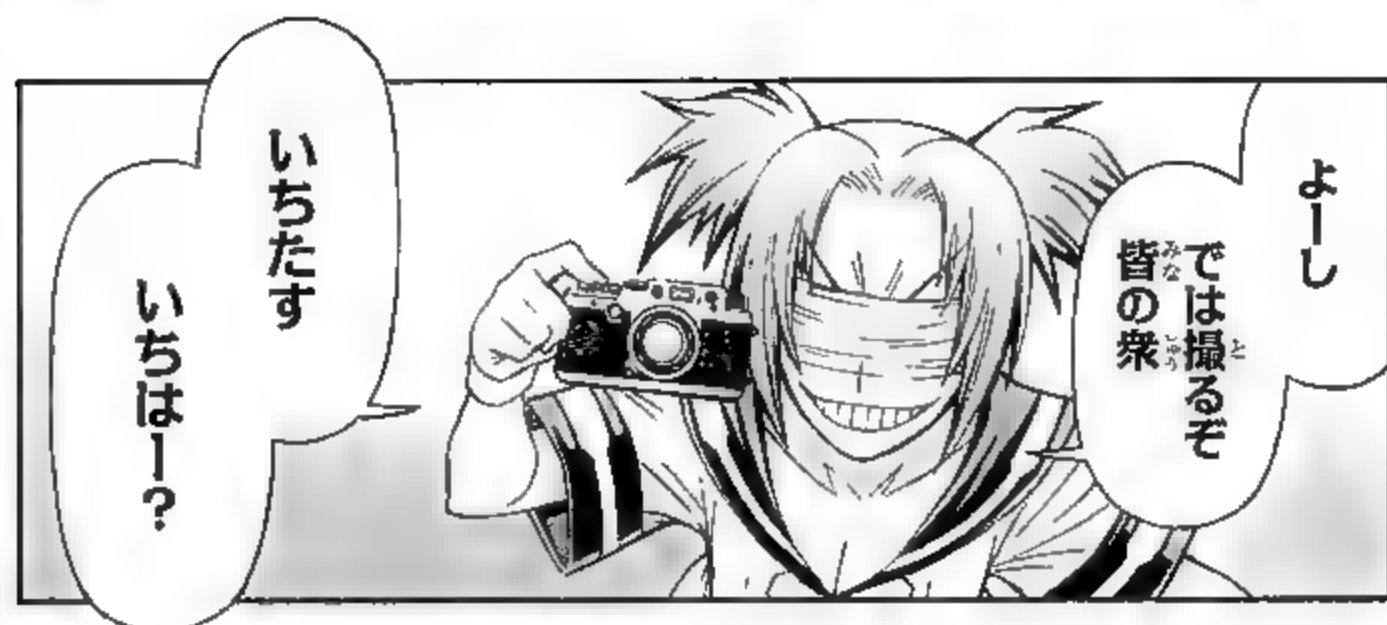
げげ：  
そうだな

あいつらが継いでいって  
くれるだろう

俺は引退だ  
これからは  
なじみの意志は

だがこれからは  
その必要もあるまい







前王学園卒業

笑顔にっ！







しらぬいはんてん おれ こんやくしゃこうぞ  
不知火半纏のどうして俺が婚約者講座②

ナンバーゼロと囁くだけあって、こいつはかなりの逸材だ。分家の中でも杠家はもとより特殊な立ち位置だったようだが（異質さにおいては、さすがに鶴喰家に一步譲るだろうが）、こいつはその生粋と言えよう。それは唯一、スタイルを二個、身につけて（舌につけて）いることからわかるだろう——その上「換喩使い」を使用すれば、実質的に無限のスタイルを使えると言っても過言ではないわけだ。もっとも、「換喩使い」にしても「嘘八百使い」にしても、彼女個人の資質をよく表している——つまり、「唯一の者」にはなれないという、呪いのような資質を。誰とでも双璧をなせるし、どんな存在とでも並び立てるが、それを越えることはできない、群を抜くことはできない奴なのだ。もしもこいつがその気になれば黒神めだかどころか、獅子目言彦に「なる」こともできただろうが、しかし獅子目言彦を凌駕することはできなかったはずだ。本人を相手にすれば引き分けることさえできなかっただろう——偽物好きの鶴喰暴博士が、最後までこいつをそばに置いた理由は、そのあたりかな？



ゆづりは  
杠かけがえ  
ゆづりは け だいひょう  
杠家代表  
がた  
AB型  
うそはっぴやくつか かん ゆ つか  
嘘八百使い&換喩使い

しらぬいはんてん おれ つるばみ け こう ぞ  
 不知火半纏のどうして俺が鶴喰家講座①

アブノーマルとマイナスとスタイル、この三つを使いこなすことができるキャラクターは、百花繚乱の箱庭学園においても、この鶴喰陽だけだった。そして意外なことに、この三つを同時に使った者は、こいつが唯一なのだ。「陽システム」だったか？ まあ対極にあるアブノーマルとマイナスを同時に使うところまでは黒神も「混神モード」で似たようなことをやっていたし、なじみにも似たようなことはできるだろうが、そこにスキルの代替として考案されたスタイル——言葉を合わせるとは、とんだセッションだ。黒神は寿常套戦と杠かけがえ戦においてスタイルを学んだが、だが現時点では、「めだかシステム」というのは無理だろう。この男はそういう言葉を喜ばないだろうが、まあ、違うことを同時に三つできるというのは、才能みたいなものだ。「前を見ながら後ろを向いて目を閉じる」みたいなことだからな。ところでこいつの母親は？ 黒神の保険として「作られた」子供であることを思うと、黒神家の関係者であることは間違いないだろうが、あまり深入りしても、いいエピソードは紹介できそうにないな。



つるばみからめ  
 鶴喰陽  
 つるばみ け ざんとう  
 鶴喰家残党  
 がた  
 AB型  
 ちょうはつつか  
 挑発使い



しらぬいはんてん おれ つるばみ け こう ざ  
不知火半纏のどうして俺が鶴喰家講座②

個人的にはこの男を変態の一言で片付けるのは無理があるように思う。ある意味、スキルという、個性による才能を凌駕するスタイルを発明したのは天才的だ——天才ではないのに天才的であるというのは、偽物を愛するこの男らしくもあるけれど、言うなら一人で、新たな言語を開発したのにも近い偉業だろう。しかもスタイルというのは、なんというか、元祖フラスコ計画の目的を達成してしまっているところがあるというか……、どんな凡人であろうと、真の天才、なじみならば主人公と呼んだ連中に匹敵できる共通言語だ。「唯一の者」、たったひとりの存在に拮抗しうる、万人の言葉——どのような天才であろうと、主人公であろうと、己を表現するためには、己の天才性を世に示すためには、言語を通して表現しなければならないのだから。もしも獅子目言彦をあそこまで「怒らせて」いなければ——彼が怒りという感情を真に理解できていればという仮定を、考えたくならないと言うと嘘になろう。ちなみに「スタイルは逆上した相手には通じない」という、スタイルの弱点というよりコミュニケーション、相互理解の弱点についてひとつだけ付け加えておくと、切り札「遺言使い」はその限りではないようだ。「死人に口なし」の逆。死んでる奴に怒っても 仕方ないものな。



つるばみくろ  
鶴喰梟  
つるばみ け もととうしゅ  
鶴喰家元当主  
がた  
AB型  
ゆいごんつか  
遺言使い

しらぬいはんでん おれ つるばみ け こう ざ  
 不知火半纏のどうして俺が鶴喰家講座③

黒神めだかの母親だ。分家の母親連合というか——黒神舵樹の七人の夫人について言うと、結構この七人、仲良くやっていたようだ。一夫多妻の状況を和やかに保つという彼の器量は、倫理的にはともかく、愛の体現者としては、大したものだろう。桃園家出身の母親である旧姓桃園亡に対して黒神が「今日はあなたがお母様の日でしたか」と言っていたことからわかるように、一日おきに、彼の妻のポジションをローテーションさせていたと言う。そして鶴喰鳩が死んで以来、週に一度、彼は喪に服しているとのことだ——なれそめとしては、鶴喰鳩の勤務する病院に黒神舵樹が入院したということらしいが、それが舵樹の親友である弟・鶴喰泉の仕掛けだったことは言うまでもない。もっとも鶴喰鳩も黒神舵樹も聡い人間だったので、彼の仕掛けというか、仕組みに、気付かなかったわけではないだろうが——まあ、黒神舵樹と鶴喰泉は、あれはあれで気が合ったようだし、奇烈な人格であり、奇烈な人格者であった鶴喰鳩にとっては、鶴喰泉という馬鹿な弟は、可愛いものだったのだろう——その可愛がりかたが、弟をあはしてしまったという因果もなきにしもあらずだが。ところでなじみもこの女とは少なからず付き合いがあったようだ。箱庭病院もなじみが創設者なのだから、当たり前と言えば当たり前なのだが、ただまあ、なじみとしては、母親連合のみならず、人吉瞳やらの『前世代』にも興味があったようだ。なのでなじみは、箱舟中学に拠点を置く前は、箱庭病院で遊んでいたと思ってもらっていい。



つるばみはと  
 鶴喰鳩  
 つるばみ け しゅしん  
 鶴喰家出身  
 がた  
 AB型  
 はくい あく ま  
 白衣の悪魔

しらぬいはんてん おれ はんてんいんこう ざ  
 不知火半纏の俺しかできない反転院講座①

というわけでいよいよ俺の話だが、俺に語るべき自己などあるわけがないのも事実だ。悪平等というのはなじみに合わせた表現だが、俺が人間でないことは確かだろう——よりよきものを保存しようという世界の意志とでも言うのかな？ 自然淘汰・適者生存の現われ、その一例だとでも思ってもらえば、概ね的外してはいない。まあ俺のバックアップが前身である現代の獅子目言彦が、俺が保存すべき安心院なじみを殺したというのだから、結構自己矛盾を抱えてはいる——だからなじみの死について、黒神ばかりを責めるのも、あまり理には通っていないかもしれない。黒神の生きかたも相当矛盾的是ではあったが、しかし最後には落ち着くべきところに落ち着いたとも言える。凡庸なる人言善吉が獅子目言彦を打倒したことによって、『保存すべき』の基準ががき混ぜられてしまったからな。それは黒神めだかが意図したわけではないことだが、しかし人言善吉を鍛えようとしたなじみの意図には通った結果だったかもしれない。俺という、彼女をミラーリングするだけの存在を、ただそこに在るだけの人外を、お役御免にしてくれたのだから。黒神めだかが獅子目言彦に勝ったところで、次は不知火の里はあいつを保存するだけだ——という危機も、結果から言えば無用の心配だった。さて、ちなみに月まで黒神を助けに行った俺だが、その後地球への帰還まであいつと付き合い、多少は話をした。コミュニケーションって奴だ。まあ、あいつも俺も、それについてはまだまだ、覚えてと  
 言ったところだがな。



しらぬいはんてん  
 不知火半纏  
 そこにいるだけの悪平等  
 AB型  
 反転院さん



## めだかボックス

21 巻

西尾維新

© 西尾維新 2013, 2013

暁月あきら

© 暁月あきら 2013, 2013

初版発行 2013 年

デジタル版発行 2013 年

発行所 集英社

<http://www.shueisha.co.jp>

この作品は、デジタル配信用に再編集を行ったものです。

本作品の内容あるいはデータを、全部・一部にかかわらず、無断で複製、改竄、公衆送信(インターネット上への掲載を含む)することは、法律で禁じられています。また、個人的な使用を目的とする複製であっても、コピーガードなどの著作権保護技術を解除して行うことはできません。